

E~~xt~~ase

—— エクスターセ —
—— 脱自體 ——

エクスタゼ（独）… 脱自、脱自態。ギリシア語でエクスタシス *ekstasis* 「外に立つ」ことを言い、脱魂の意。英語ではエクスタシー *ecstasy* 通俗的には快感の絶頂で忘我の境に陥ること、宗教的には神に近く接するような超越的瞬間などを云う。『パイドン』（プラトン著）の中で、ソクラテスは「純粹にものを見ようと欲すならば肉体から抜け、魂によって事象そのものを見なければならない」と言った。自らを超越して客觀的に觀照することができる状態。哲学者ハイデガーによれば西欧伝統の固定的自我から脱却乖離し、精神が非対象化的な在り方をしてゐる状態。すなわち人間は未来に必ず現實化する『死』に対して眼を伏せ、固定的・対象化的な生き方に埋没し、非本来的な生き方をしてゐるが、『死』を予定して覺悟する超越的時間性を觀照し、生産効率・支配優位・所有権力を追求する価値固定・靜的なコギトから脱自して生成的な状態になることを示すと解釈する。

動脈からあふれ

噴いたかの濃ろ

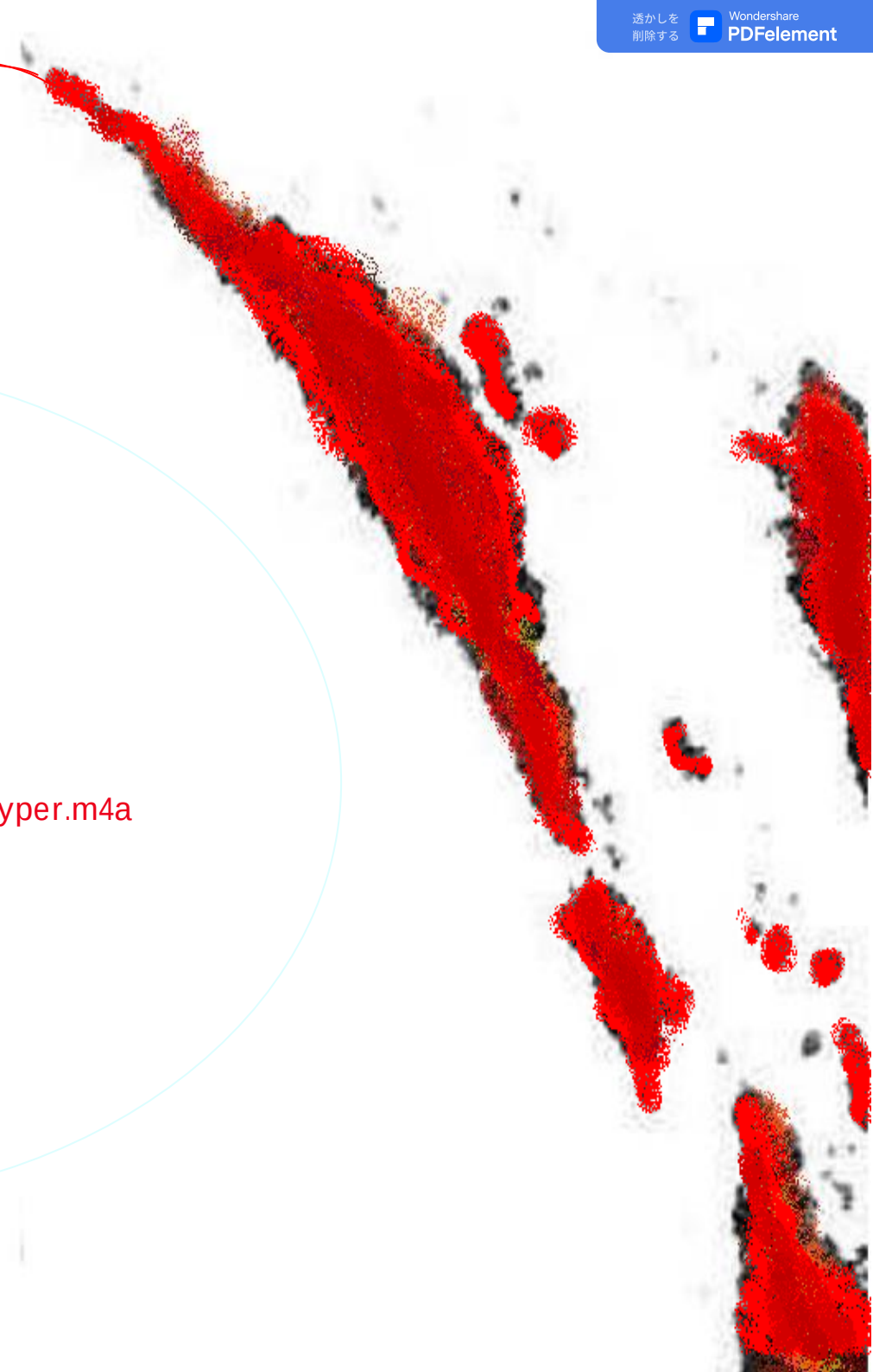
で鮮ぐ

Crimson Red.

濡れつゝ生々しい。

合成樹脂 Nylon

の繊維のよう人工的な透明さの奥底に塊々の列々と鮮やかな暗い
を射つたような鮮やかな Reality への場をひたひたに集められ
黄昏時の濃金色に絵を演ず。現実を裂き超えたいと身悶え切望する私たち焦燥に炙られがたは擦られた弦から醗
酵するバイオエッチの音のちのちの影を長く牽を伸ばす
事物を眺めるとちのち寂寥たると生々しい。



<https://ssl.xrea.com/sylveeyh.g2.xrea.com/bluezhyper.m4a>

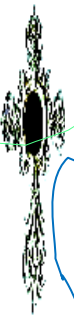
寂かに
すしみが轉じ
ただず。
吐歎。

その退廃の中に耽りながらも「テアロン」が
自発的に生んだ虚し
い像を、再
び眺め
る。こう
して
彼は
生前、
その
緋色
の鬘
を頻
りに振り靡
かせていた。

ナルキッソス *Narkissos* (古代ギリシアの美少年。ナルシシストの語源となった) じみた演技。人が眉顰め皺寄せ盛ませ、苦笑し、愚弄嘲笑させし兼ねないと知っていても、いや、知るからこそ、彼は敢えてやる。

それがイタル *Style* だった。たゞは涎を垂らし、白眼を剥いて痴態を晒すことによって、自虐的に世間の良識を凌辱する行為に酷似する。髪を緋色に染めたことなど、後々のことを思えば序章に過ぎない。その次はもっと凄かった。とは言え、片田舎の私立真神高等学校にとってはそれだけでも大センセーションであった。

青龍が曼荼羅のごとく生々しく膚を這い飾るのはそれより後のこと。緋色の髪など序章に過ぎなかった。しかしすべてはその萌えいずる兆しのごときが美しい。黎明の兆しが星辰の闇空を、薄青い透き通った穹へと変え、きよらやかに広がり澄み透らせるように。生誕のごときこそその最も本質の時なのである。交響管弦楽の序曲や映画のプロローグや小説の冒頭のように。



あまひらやしゅう
天平普蕭がイタルとつるむのは高校生になってからが初めてではない。

二回目だった。

最初は小学生のごときだ。とても短い期間で、大人の眼から見ればほんの一瞬でしかない時間だ。

十一歳であつたそのとき、イタルがでたらめにブルース・ハープ *Blues Harp* を吹きまくり(いま思えば、なぜ彼はホーナー *Hohner* 社の単音十六ハーモニカ、ブルース・ハープ *BLUESHARP* なんかを持っていたのだらう。それは小学校の授業で使うものではなかった。学校ではダイアトニック・ハーモニカ *diatonic harmonica* が使われていた。しかしその頃、不思議に思わなかった、普蕭は幼少から習っていたバイオリンを弾いた。

曲はイタルが鼻歌で作った滅茶苦茶なもので、楽曲と言える代物ではなく、普蕭はその

超々前衛的な曲に苦心して拍子や節をつけた。という経緯いきさつでそんな役割分担になったのか、音楽を理解している普蕭の曲ではなく、でたらめで捨て置くべきイタルの『曲』をなぜ取り上げることとなったのか、まったく記憶がない。

ともかく放課後、一週間だけ二人は熱心に練習した。いや、イタルは熱心ではなかった。熱心ではなかったが、小学生らしからぬ執著を示し、異様な、不気味な、暗鬱な情念を注いだ。

であったにも拘らず、長く続かなかったのはイタルの気まぐれのせいである。

以来しばらくは空白の期間だった。特に中学時代はまったく接触がなく、高校も二年の頃は顔を見たかどうかさえ定かではなかった。

復活したのは二年の五月である。

普蕭が学校の授業を終え、きれいに櫛の入った長髪で、制服のブレザーの下にミントグリーンミントグリーンのサテン地シャツとピンクと黄緑と紫と黄のペーヅリーpaisley柄のシルク・タイをし、サイケデリックな雰囲気で、学校と同じく眞神村にある自宅の前を見向きもせずに通り過ぎて鉄道に乗り、薙久簗町の駅で降りて古本屋に行くこと、いつも横切る公園を考へもなく通ったときだった。

どこからか、チューニングの狂ったギターをかき鳴らす音が聞こえる。あまりのひどさに足を止め、道を変え、近づいてしまった。

いたのはイタルだ。しゃがみ込んでアコースティック・ギターを抱え、がなっていた。歌っているのかどうかすらわからない。

「ロバート・ジョンソン Robert Leroy Johnson (1911.5.8 - 1938.8.16)」

普蕭の問いに対し、それが答のすべてだと言わんばかりぶつりと独り言のようにイタルがつぶやいた。

聞いたこともない、1930年代のアメリカ南部のブルース・ミュージシャンの名前。

「おまえにはわからないさ。」

わかるわけがない。ふ。そういうことさ。

おまえにはロバート・ジョンソンは理解できない。おれ以外には理解できる人間などない。誰にも理解できない」

普蕭は戸惑いながらも言う、

「音が合っていないよ」

正確に言うそれ以前だ。相変わらず音楽というものを理解していない。ギターを取り

上げ、調律した。

「これでいい」

何となく安心した。

「へー。」

そんなことって、できるもんなんだ」

イタルが無感動に感心する。普蕭から無造作に奪い取り、爪^{つま}弾く。

「ふ。」

味がなくなっちゃったな」

確かにそんな気もした。

「イタル、小学生の頃、憶えているか」

「どんなことだ？」

「僕がバイオリンを弾いた」

「ああ、憶えてるよ。」

おれはハープだった」

そのときのサウンドはスマートフォンで撮影した動画でYouTubeにアップされ、イタルの死後、削除されたが、少数の人間がダウンロードしていて、そのデータがマニア垂涎の的となっている。

追悼盤の『The Remastering of vvw』の冒頭にも収録されたその動画から垣間見られる彼らの最も初期のサウンドには、稚拙で音楽的に破綻しながらも、迸るイタルの剥き出しの特異性の萌芽が見られた。誰も教えていないのに、直感的にミュートやベンディングを行い、不思議な、即物的で、異教的な音質を奏らせ、音楽というよりは音による金属片コラージュのようであった。

音に関する即物性へのこだわりを問われて彼はかつてこう応えたことがあったという。

「おれの遺伝子の中にあつたのさ。性癖なんだ」

この公園での再会の時点で、普蕭は既に同級生らとバンドを作っていた。

イデーン、それがバンド名だ。2ドラムス、ヴォーカル、ベース、2キーボード、3ギターの9人編成でプログレッシヴ・グランジともいへきヘヴィー・サウンドのバンドだった。長い曲が多く、20分以上も続く曲もあった。サンプリングや打ち込みも多用し、民族楽器なども取り入れてレーコーディングしたので、ライブでの演奏不可の曲も幾つかあった。

普蕭はそこではギタリストだった。

ライト・スピード

中学校一年生から独学で始めたギターの技術が、中二の頃には超絶の早弾きができるほどになっていて、高校生になる頃にはイングヴェイマルムステインの演奏さえアコースティックで完全にコピーができる腕になっていた。難久簗町神中洲のライブハウスのステージに数回立っただけだが、眞神郡では有名人であった。むろんバンド系の人たちだけにではあるが。

「時々思い出すぜ、最近な。」

あの頃は純粹でよかった。

何も考えず、表現したいものを剥き出しで出していた。誰にもわからなくたって、かまわなかった」

いまでもそうじゃないか……普蕭は思ったが、言わなかった。気を遣ったのではない。イタルにとつてはきつとそうなのだ。イタルでさえ大人になるんだ、と思っただけだった。

「僕もだ。」

よく考えるんだ。この頃は」

「へえ。おまえがねー」

「あるさ」

「どういうことを？」

「音楽が作れないんだ。作っても虚しいからだ。何をしたいか、わからない。何をしたい、何にもならない」

彼はここ数カ月、曲を作りながら、曲をアレンジしながら、常に一心不乱に追究していた。「人はなぜ生きるのか」と。

しかしその問いはかたちだけのものではなかった。問いが感覚にリアルじゃなかった。その方向性は合っているが、それが欲しいものズバリではないという感覚。問い自体が空疎であつては答などあるはずがない。

フラストレーションは募る一方で、普蕭はどんなサウンドにも満足できなかった。真実が欲しい。

バンドにも嫌気が差し、遂に昨日、言っただけであった。

「辞めるよ。」

君らだけでやってくれ」

普蕭の脱退はバンドの崩壊を意味した。それでも彼は辞めずにいらなかった。

「イタル、また一緒にやらないか？」

「ああ、いいぜ。」

おれもいまそう思っていたところだ」

こうして *Quadruple V* (クワドルプル・ヴィ) は生誕したが、二人だけの時点ではまだバンド名がなかった。追い求めるものしか見ていなくて、体裁のことなどまったく気にしていなかったからだ。

その名が決まるのは**叭羅蜜斗**^{ばらみと}の出現を待たなくてはならない。

金髪の短いスパイキー・ヘア、接ぎをして袖を長くしたTシャツ、安全ピンのピアス、南京錠附の鎖ネックレス、気分は1977年、ジョニー・ロットン *Johnny Rotten* だ。

彼は中学時代からパンクな不良だったが、県指定文化財の古刹、貞観正國寺の倅^{せがれ}で、普蕭やイタルと同じ高校の同学年だった。

最初は当時中学3年生だった**葬之非无呂**^{いのヒムロ}が作ったバンド、*The Carrion Soldiers* (死肉の戦士たち。CS) のベーシストになった。(ちなみに、非无呂もイタル同様に**葬之**^{いの}一族の人間で、幸い存命しているが、現在は活動も消息も不明である)

当時中二だった叭羅蜜斗はパンキッシュな発言やスタイルで話題になっただけで、ほとんど音楽的な功績を残さないまま、わずか2か月で脱退、その後、高一になるまでバンドを転々とし、鴉の死骸 (*Corpse of a crow* CC) に入って、バンドを演る高校生たちの間で再び話題に上るようになった。

CCがアマチュア・パンク・バンドとして県内で名が知られていたからだ。
しかし。

「地元での最後の戦いだって」
ラスト・スタンド

イデー *Ideen* の春慶にそう言われた。

叭羅蜜斗は何も知らされていなかった。その日の夜、彼は**薙久簔町**^{なぎくさ}の地下階にあるライブハウス、ブラウン・シュガー *Brown Sugar* (BS) に行った。CCの最年少のベーシストは一人の客としてラスト・スタンドを見る。

彼の中で怒りが滾った。

叭羅蜜斗にはアーティストとしてのセンスが根底からなかった。アンサンブルも整わず、フリージングに個性もなく、恐らくはかつて聴いたロック・サウンドの中の、気に入ったフレーズ、もしくは気に入った音触に傾倒してそこから抜けられず、どの曲で弾いても同じ印象を与えることしかできなかった。

「東京進出に、叭羅蜜斗だけ置いて行かれるらしい。もう後任のベースとは決まってるんじゃないか」

ライブ終了後、誰かがどこかでそう言っている気がした。叭羅蜜斗は楽屋に飛び込んだ。

「おまえはまだ二年も学校があんだろ。おれらは卒業だけだな」

「そーだぜ、^{どうげん}同源、おまえ、高校ぐらい卒業しろよ」

叭羅蜜斗は眼を剥く。

「うぜえや。ガッコなんざ、辞めてやんよ」

「高校ぐらい卒業しろや」

「ざけんなよ、オレあ、パンク・ロッカーだぜ。辛気臭え意見言つてんじゃねー」

「あせるなよ、叭羅蜜斗。」

卒業してからおれたちを追って東京に来りやいい」

「ベースなくてどうすんだよ」

「代わりを探すさ」

そんなはずがない。

東京に進出するつてのに、ベースが決まっていけないなんて。きつと既に……叭羅蜜斗はそう思った。



バンド名の由来は Very Very well-done (非常によくなされた、とても入念に焼かれた) で、略して v v w だが、これをヴィ・ヴィ・ダヴリユとは読まずに、クワドルプル・ヴィと呼ぶのは、w を二つの v (だから w は Double と称される) と見なし、v が 4 つあつて、すなわち 4 倍、4 重の v、*Quadruple V* (クワドルプル・ヴィ) であるとするところによる。

また *well-done* という言葉が肉を十分に焼くことであることから、叭羅蜜斗は『ジューシーさのないハードな、地獄の業火に焼かれたように乾涸びた』というニュアンスを勝手に付け加えてこれをバンドの名前にしたいと申し出たのであった。

叭羅蜜斗を誘ったのは普蕭だ。

ある夕、風神雷神というユニットとサージェント・ジョ *Sergeant Jo* というバンドの演奏が B S であり、普蕭がそのパフォーマンスを見ていたからである。

この日、叭羅蜜斗が風神雷神のベーシストとしてステージにいた。当時の彼は半年以上、バンドを転々としていて、既に自暴自棄の塊だった。イタルと組み合わせてみたい、普蕭

にそう思わせた。

幸い風神雷神でその日、ギターを弾いていた彝之^{いれつ}は特定のバンドに属さない、自称「さすらいのギタリスト(笑)」で、普蕭らとセッションしたこともあり、また同じく眞神村^{まがみ}の出身で小中も同じ、昔からの友人で、イタルの親戚でもあり、普蕭はゞ裂に仲介を頼んだ。

普蕭にとって叭羅蜜斗は畝邨村^{ほむら}の出身者で接点も少なく、同じ眞神高校だが、言葉を交わしたことさえない存在だったからだ。

叭羅蜜斗が怪訝な顔で、楽屋から出てきた。

「何でオレなんだ？」

普蕭は笑って応えた。

「それだからさ」



最初、神中洲の楽器屋二階のスタジオに集まったとき、普蕭は敢えてドラムセットに座った。ドラムスがなくてはバンドにならない。彼はそう考えていたからだ。

「A、F m、D、E7。シンプルなコード進行で、リフもシンプルだ。まずこれで合わせてみよう」

普蕭がそう言い、早速音合わせ。しかし惨憺たる結果であった。イタルが叭羅蜜斗に噛み附く、

「おい、おまえ、何だ、そのドコドコうるせえベースは」

「テマーに言われたくないぜ。コードも知らねーギタリストなんて、聞いたこともねーぜ」確かにイタルのギターはまったく合っていない。すべてが。ノイズ以下だ。

しかし叭羅蜜斗もルート音をヘヴィーに響かせるだけで、アンサンブルになっていない。よくこれでステージに立っていたものだ。いままでラフで荒っぽいサウンドのバンドにいたせいでパフォーマンズと思えていたものも、こうして聞くとひどいものだった。すぐ捨てられてしまうのも、もつともなことだ。

十代前半から何年もやっていながらこの程度では根本的に音楽的センスがないとしか思えない。

或る意味、イタルの方がましとも言えた。

「待てよ。」

はつきり言って二人、どっちもどっちだよ。叭羅蜜斗、ベースは重低音で迫力を出すた

めにあるんじゃない。アンサンブルの低音部を構成するものだ。さあ、いいかい？ 叭羅蜜斗、まず君からだ。君の方がイタルよりは音楽に近いからね」

イタルは自分以外なものも存在しないかのように涼しい顔で和音をなさない弦を押さえ、不快なサウンドのリフを弾いている。

「よし、じゃ、叭羅蜜斗、合わせてみよう」

ベースとドラムスで曲を演奏する。いくらかましな感じだ。

そのとき、スタジオにベ裂がストラト・キヤスターを担いで入ってきた。

「おお、どうだい？」

そう言つてさつとギターをアンプに繋ぎ、レイジーなサウンドを奏でる。

イタルが手を止めて、

「へー。いーじゃん。味だよ」

そして普蕭の方を向きながら、

「そら、音が狂つてる。だから、いい味だ」

「イタル、君の調弦の狂いとは、ぜんぜん違うよ。ベ裂のは少々弦が緩んでるんだ。

しかしそれがわかるようになったのは進歩か……」

イタルは再び自己流リフを弾き出す。叭羅蜜斗が怒鳴つて言う、

「だから何なんだよ、その変なコードは」

ベ裂が豪快に笑った。

「楽しそうだな、叭羅蜜斗」

「冗談じゃねー」

吐き棄てるように応える。

普蕭が言った。

「さ、練習だ。A、F m、D、E7。さっきの繰り返しだ」

ベ裂が提案し、

「具体的に曲をやった方がいい。

チャック・ベリーはどうだい？」

「そうか。君は古いロックン・ロールしかやらないんだったね」

「そうでもないさ。

ストーンズぐらいまでならOKだ」

「ああ、じゅうぶんさ」

普蕭が手を振ってそう応えた。イタルを除く3人が『Carol』を演奏し始める。顔が紅潮し、叭羅蜜斗もすっかりご機嫌になった。

汗をタオルで拭いながら普蕭がベ裂に言う、

「こんどのコンペ、出ようと思ってるんだ」

ベ裂は鼻先で笑っただけだった。

「コンペ？」

イタルが訊き返す。

「そうさ。」

毎月、BSで出場権を賭けた競争 competition があるのさ。そこで勝ち抜かなくっちゃステージには立てない」

イタルが苦い顔をした。

「おれは嫌だぜ」

叭羅蜜斗が眼を丸くする。

「何だよ？」

「メジャーになりたくない」

叭羅蜜斗は一瞬信じられないという表情で呆気にとられたが、すぐに腹を抱えて大笑いした。

「ばかじゃねえのか、何がメジャーだよ、田舎のライブハウスのステージにアマチュアバンドで立つくらいだよ。」

「だいたい、そんなに簡単にメジャーになんかなれるかよっ」

イタルは赤面するどころか、苦い顔つきを、その真剣で冷静な表情をまったく変えなかった。

「嫌なのさ。メジャーになると腐っちまう。外ヅラになっちまうし、社交辞令の塊になっちまう。」

オーディエンスや視聴者や読者や取引先や消費者や隣人や公衆や有権者や支援者や親類縁者や恋人やレジのお姉さんにも気を遣う。嘘を吐く。

それが社会だ」

「意味わかんね〜んだが」

唇尖らせる叭羅蜜斗にイタルは物憂い目つきで応え、

「考えてもみな。世の中、嘘だらけじゃねえか。」

企業の広告は嘘だらけだ。

「皆様のために」 「お客様の笑顔のために」 って言いながら、イメージアップして金を儲けたいだけだろ？」

それとも企業は儲けなくて全部寄附してくれるのか？

あるいはCEOを高級車で送り迎えをさせねーで貧乏人に分けてくれんのか？ 年棒数億円つてのをやめて配ってくれるのか？

だいたいそいつは一人の人間の一生分を6ヶ月で働けるのか？

でたらめだぜ。

へっ、政治家も嘘つきだ。

市民のため？ 国民のため？ 暮らしを守る？ 総理大臣になりたいだけだろ？ 権

力が欲しい、利権が欲しい、ただそれだけだろ？

官僚も警察幹部も同じさ。

ただ自分の身のためだ。言ってること、全部嘘じゃねえのか？

芸術家だって嘘つきだ。

あるのはただ肥大した自意識と屈折した自己肯定欲と、自己顕示欲とナルシシズムさ」

「ミもフタもねーヤローだな。

ま、違っちゃいねーけどな」

「くだらねーことだ。

つまり嫁が姑に本音を言っちゃ家庭が成り立たねーって程度の話さ。ふ。どいつもこい

つも何もわかつちやいねー。

自分が誰だかすら知らないのさ」

「じゃ、おまえは自分を知っているのか」

「ふ。

わかつてたまるか」

叭羅蜜斗が手を振った。

「OK、もういいぜ。

別にかまわねーよ、BSの件は」

黙ってギターをいじっていたメ裂が、

「いや。

俺はいまのイタルの言葉を聞いて気が変わった。絶対、出るべきだな。当分の間、俺も

参加するぜ」

普蕭も静かに言う。

「そのとおりさ。僕の考えは最初から変わらない。やれるところまでやるだけだ」

イタルはしばらく沈黙していた。

そしてどうでもいいような口調で言った。

「いいぜ。」

どうなつてもしらねーけどな」

叭羅蜜斗が鼻でせせら笑い、

「ああ、念入りに頼むぜ。」

ベリー・ベリー・ウェルダン Very very well-don にな」

その数日後、普蕭がBSのコンペにエントリーして帰って来た。普蕭のスタジオに4人が集まる。普蕭は家の敷地内にあった離れを、簡易な録音スタジオに改造してもらっていた。

「来週の木曜日だ」

「オレたち以外は誰がいる？」

叭羅蜜斗がすかさず訊く。

「RZDだ」
リザド

叭羅蜜斗が顔を顰め、ズレがおかしそうに笑った。

イタルが尋ねる。

「何なんだ」

「天之翳廊のバンドさ。
あまのかげろう

若造だぜ」

「若造？」

「いや、僕らとタメだ。」

叭羅蜜斗が言いたいのは、イキがつてるだけでチャライ野郎だつてことさ。しかしそうではないと僕は思う。

ダークなイメージだけど。

そう言えば、ほとんど笑ったのを見たことがない。同じ学校だよ。君も知っているだろう。サイケな変わった音楽をやる。ナルシシストなところが鼻につくが、意外に面白いバンドだ」

「へー、それがメ裂が笑った理由か？
いったい、何があるんだ」

叭羅蜜斗が肩をすくめた。

「大したことじゃない。」

奴はクズさ。だからクズ野郎って言ってやったんだ」

「おまえはほんとに暇なヤローだな。」

で、どこで、いつ言っただ？」

「奴がステージにいるときさ。」

おまえ、知らねーのか。去年、文化祭で講堂のステージにオレが上がって奴に唾を吐いたのさ」

「おまえ、マジでクズだな。」

ふ」

普蕭が訊く、

「イタル、君はほんとに知らなかったのか？」

「あたりまえだろ？」

おれが文化祭の日に学校にいたと思うのか？」

普蕭は手を振った。

「わかったよ。」

さ、練習しよう。BSで演奏する曲を決めるんだ」

意外なことに数日後、イタルのギター演奏はいくらかましになった。

しかし時折何かが脳裏に閃くようで、正常でないギターの使い方を唐突にし、凄絶な音を乱入させることが頻繁にあった。イタルはその奇怪な破壊音を造るために様々な小道具を使う。ボトルネックなんかはまともな方（いや、まともなボトルネック奏法で使うならまったくもって普通なのだが）で、フォークやナイフ、**BLUES HARP** や普蕭のバイオリンの弓などで弦を叩き引つ掻き切り裂き弾き摩擦し凄まじい音を入れてくる。ただそれが妙に決まっているときがあった。段々誰も文句は言わなくなってくる。

叭羅蜜斗などは不貞腐れているが、普蕭はむしろ喜んでいるようだった。メ裂は何が起ころうとも動じず、ただ面白がった。

「オリジナルが欲しいな」

叭羅蜜斗がそう呟いた翌日、イタルは一つの lyric を持って来た。

I've got Blues. You've got me. You've really got me, baby, yeah.

I've got Blues.

I got in a madman. Since then you've drive me crazy.

You've really broken down me. I've got the blues.

I break down everything. But I don't know this meaning. Yes, I never understand it. I gradually lose reality.

I've got so cool. Reality is only reality.

Everyone knows it, yeah. And anyone never knows.

I've got Blues.



「アイブ・ガット・ブルースってんだ。
おれは歌ってハープを吹く。
ギターは任せたぜ、ベ裂」
「おい、で、曲は？」
叭羅蜜斗が訊くと、イタルは、
「これから俺が歌う」
「コードぐらい振ってないのかよ」
「黙って聴いて適当に合わせろ」
「わかった。テキトーに弾くから、歌えよ、イタル」
ベ裂がピックで強く5、6弦をはじきながら言う。オープンDに調弦してあるギターが
ぶうんと唸る。後にベ裂は6弦を張らなくなるが、この当時はまだ1から6まですべての
弦を張っていた。

「いくぜ」

イタルが叫ぶ。それが左の歌だ。

普蕭は最初、シンバル類を使わずに追従し、ベ裂はミュート気味にE、A、G、Eのコードでリフを作り、機械的なノリでそれを繰り返す。叭羅蜜斗は嫌そうにおもむろにベースを肩にかけ、ベ裂の運指を見ながら4弦のみを使ってルート音を爪弾く。

歌の合間に狂おしい **BLUESHARP** が入った。身から振り絞るようにイタルの吹く **Harp** の迸る金切り声はまるで空間を切り裂き破るような感じだった。

ベ裂はイタルのヴォーカルと絡めるようにアドリブでブルージーなフレーズを弾く。普蕭がハイハットを叩く。皆がだんだん狂おしい気持ちになってきた。叭羅蜜斗はピックを使ってベースの3、4弦をはじく。スネアドラムが烈しく連打され、ブレイク。ベ裂のギターソロが始まる。タメてヴィブラートを利かせ、ミュートを多用した短いフレージング。

7、8回演奏するうちにシカゴ・ブルースのような形になってきた。たとえばマディ・ウォーターズ **Muddy Waters** (1915.4.4－1983.4.30) が紫煙の燻る黒人のクラブで吼えた『**Mannish Boy**』みたい感じた。

「よし。このぐらいにしよう。あまりやると慣れてくる」

「それが練習つてもんだろ。慣れなきゃ本番でとちるぜ」

叭羅蜜斗が反駁する。

「ふ。」

おまえほどパンク・ロッカーらしくない奴もいないな。

律義なこと言ってるじゃねえよ。

これ以上やるとまくなっちゃうんだ。緊張がなくなる。ヴィヴィッドじゃなくなる。形式に墮落する。スリリングじゃなくなる。

だめだ。そんなもんライブじゃねえぜ」

「おい、利いた風な口利くなよ、

ステージに上がったこともねーくせに」

「だがイタルの言うことも間違っちゃいないぞ。叭羅蜜斗、おまえだってそう言われりやそうかもなつて、いま思ってるんだろ。」

最後の言葉の語尾が少し下がってたぜ」

ベ裂が嗤う。

「いずれにせよ、休憩しよう」

普薫がステイックを置いてそう言った。



ブラウン・シュガーは難久簗町の神中洲の雑居ビル地下にある。

6月、既に明るく、鴉が数匹、飲食街の出した生ごみの袋を裂いて喰い漁り撒き散らし腐臭が鼻を刺す。神中洲は繁華街で午前4時のいま、クラブのお姉さん方とはとくに退勤し、怪しげな外国人が帰宅して行く頃合いであった。

イタルはBSを見上げながら路上にしゃがんでいた。

それは受け入れられないものを受け入れられないまま自己破壊への志向からなそうとする行為であった。「メジャーになりたくない」だからこのステージに立つ。自己否定の覚悟をBSを睨むことで成し遂げようとしていた。Harpをポケットから出す。ちよつと息を吹き入れる。リードは暖まっついていて悪くない感じだった。Bluesを吹いてみる。鴉が応えて「あー」と禍々しく鳴いた。イタルは「ふっ」と鼻先で嘲るように笑う。

『I've Got Blues』を大声で歌った。

道行く人が顔を顰めて一瞥し、通り過ぎる。イタルはそれを見て喜悦する。

「誰もがおれを否定する。」

おれは損なわれる。おれは無意味な屑だ。軽薄で莫迦でチャライ。最高だ。おれは自己保身や少しでも損にならないように躍起になる連中とは真逆だ。理不尽な名誉毀損や正当な権利が損なわれることにムキになる愚劣者とは大違いだ。給食費を払っているから食べるときは戴きますすって言わせないとか抗議する母親みたいな権利意識の偏った莫迦とは正反対だ。損すること利益が損なわれることこそ最高だ。世のすべての価値におれは叛らう。社会の基盤を根底から崩す。人の世の価値を根底から崩す。なぜか？ むろん意味などない。意味なんかあったたまるか。意味がなきやいけないって、みみっちいぜ。くだらねー人生だ。小せえ。賤民根性。どこまで貪るのか。嗤わせる、莫迦ども。犬死にこそ最高。無意味無駄な徒労の人生がデフォだぜ。

ふ。

別に理由なんかない。あつてたまるか、つてな」

唾棄する。

学校へ行った。



BSのある雑居ビルの壁は廃れ汚れて雑色をし、朽ち毀たれ缺けている。剥がされたポ

スターの残骸が何重にも残滓し、複雑な模様をなしている。手すりの錆びた狭く昏い階段を降りると240㎡(12 m×20 m)ほどのフロアがある。パイプ剥き出しで音響は最悪だが、山羊鬚でチベットの民族衣装を着た名物オーナー兼店長の八木沼風のこだわりで数千万円のアンプを始め、高級な音響機器をステージに設置していた。ステージの両脇には古いマーシャルアンプを山積みして仕切りを造り、簡易な楽屋を作っていた。

ステージは低く、6人編成ぐらいでドラムやキーボードがあるバンドなどはギリギリいっばいだ。

八木沼氏は高校生を7時以降はステージに上がらせなかった。

コンペは6時に始まる。持ち時間は約15分間。通常は2〜3のバンドを演奏させるが、その時間帯を無料にしている。

高校生に演奏料を払わないから客からも料金を取らないという考えだ。飽くまでも高校生の発表の場で、営業ではないというこれもこだわりであった。

このコンペの順番はくじ引きで決める。

「先に演る方がオーディエンスに与えるインパクトが強いから有利、つてのがセオリーだ。後のバンドは前を超える演奏をしても普通だなんて感じられちまうもんだぜ」

「僕にプレッシャーをかけてるのか、叭羅蜜斗」

「くじ運は強い方か、普簫」

「ベ裂……そうでもないんだよ」

「ふ。」

「ちまちましたこと言ってるじゃねーよ」

「おまえ、マジで身も蓋もねー野郎だな」

「うれしいこと言ってくれるぜ。」

「おれを喜ばせるなよ、叭羅蜜斗」

「さあ、ともかく行ってくるよ」

くじは負けだった。

「ちっ、そんな気がしたぜ。何しろ疫病神がいるからな」

「それがおれの肩書きさ。」

「ふ」

「へえ、増えたんだ？」

「非業惨死や横変死だけかと思っていたぜ」

「いくらでもある」

「大したもんだ」

「ふ。そのうちわかるさ」

RZDが始まった。

呪文のような呻きで始まった。

暗黒のステージ。翳廊だけがスポットライトで照射されている。

唐突に音の大洪水が始まった。

サイケデリックな意味不明な合成音の大氾濫。その怒濤は途轍もなく膨れ上がり、空恐ろしいほどだった。民族音楽の管楽器や打楽器を重ねて録音したものでサバトのような魔的な狂騒狂乱。断末魔のような翳廊の喉潰しの絶叫、何を言っているのかはわからない。

突如、すべてが止まり、静寂。

一斉に照明が輝き、ギタリストの性急な早弾き。マシンガンのようなドラムスの追撃。疾駆するデスコア Death Core だ。翳廊のシャウトは *screach*。

またもいきなり演奏停止、照明が消え、再び翳廊へのスポットライト。ポケットから紙を出し、自作の詩を朗読。

「これで終わりだ」

そう言つてステージを降りる。スポットライトも消える。持ち時間は7分間も残つていた。ざわめき、皆が困惑している。何が何だかわからない。全部中途半端でまったく理解できない。

叭羅蜜斗が唾棄するように言う、

「相変わらずのナルシシストぶりだ。狂気を演じているのさ。」

カリスマぶつてな。

誰にも理解されなくてもいいっていう風のエンディングだ。燦し銀筋金入りを装つていやがる。へ、気色悪いぜ」

イタルが表情のない眼差しで言う、

「さ、行こうぜ。ステージだ」

v v w がステージに上がった。v 裂が向かって右、叭羅蜜斗が左に立つ。

イタルは正面のヴォーカルマイクの前に立ち、BLUESHARP の雄叫び。戦を告げる法螺貝のように吹き鳴らす。だが背を向けて後奥へ下がってしまった。

「クワドルプル・ヴィです。演奏します」

普蕭が慌ててマイクをつかみ、そう言う。

イタルはドラムセットの前にしゃがんだままだ。

叭羅蜜斗は苦々しい顔でイタルを振り向く。メ裂は構わずイントロを弾く。

普蕭がエイトビートを刻む。

イタル以外三人がコーラス。不自然に同じフレーズを繰り返す三人。痺れを切らした叭羅蜜斗がイタルに向かおうとした瞬間、面倒臭そうに立ち上がってそっぽ向きながらマイクの前に立つ。

曲のテンポに関係なく滅茶苦茶にHarpを吹く。叭羅蜜斗がベース演奏を止めたと同時にイタルが鋭くシャウトして歌う。メ裂がエフエクトペダルを踏んでターボ・デイスティオンをかける。普蕭のドラムが息を吹き返したようにスピードを上げる。別の曲に切替わったことに気が附いた叭羅蜜斗が慌てて弦を爪弾く。

トリッキーなプレイだが、即興にしてはうまくいった。理由があつた。古いブルースには音楽的な法則を無視し、イントロと本体とが別の曲を繋げたかのように、テンポなどが全く異なるものがある。すなわち練習でロバート・ジョンソンを演奏していた彼らには下地があつたのだ。ちなみにエリック・クラプトンなどは「ロバートは囚われずに自由に弾いた」と賞讃する。

演奏は終わった。

「虚しいぜ」

イタルが呟く。背を向け、再びドラムセットの前にしゃがむ。

無料とは言え、今日の6時台の客は不運だと言わざるを得ない。ボジョレーヌーボーを好む人のようにこの新人コンペを好む常連がいるが、彼らとて失望しているに違いない。叭羅蜜斗は普蕭を振り返って眼で合図した。予定どおり2曲目のイントロをベースで弾く。メ裂もポケットからスライドバーを出し、ボトルネック奏法を始める。指にバーを装着して弦をフレットに触れないように当てて弾く奏法だ。スライドさせ、ヴィブラートやグリッサンドを多用するのが普通。メ裂もその例により演奏する。ワウペダルを踏み、ワウワウ効果を加え、グニャグニャした音を噴出させる。

イタルがギターを持つて立ち上がり、腕を大きく旋回させて6つの弦のすべてをピックで打ち下ろす。雷鳴のような轟音が響く。曲に関係なく、イタルはその霹靂を乱発した。叭羅蜜斗の開いた口が塞がらない。

普蕭には雷霆神が叢雲と霹靂とを伴って突如現われ、稲妻の閃光が桜花爛漫のごとく散

り乱れたかのように感じられた。

「I've got blues!」

イタルが歌う。

♭裂がその曲のリフをかき鳴らす。叭羅蜜斗がパンク風に唾を吐き、自棄糞気味に弾く。イタルはHarpで空間を切り裂き、♭裂が大きくチョークアップした弦をスローにダウンさせながら烈しくオルタネイトピッキングする。

普蕭と眼を合わせた叭羅蜜斗の顔に笑みが出る。

そのときだ。

イタルがHarpでギターの弦をかき鳴らす。破滅的なノイズ。さすがの♭裂も眼を剝く。普蕭もだ。しかし怒鳴ろうとする叭羅蜜斗が凍りついた。

イタルはギターを振り上げ、振り下ろす。数千万円のスピーカーや数百万円のアンプにだ。電氣的破壊音の炸裂。八木沼が席を立てて怒鳴り、ステージに上がる。制止を振り切り、イタルは狂ったようにギターでハイエンドモデルの音響機器を次々叩く。破壊する。往年のジミヘンやザ・フーもこれほどまではと思わせる狂行。

その後の惨状は凄まじかった。八木沼は憤怒で血管を浮き立たせて赤黒くなり、v v wのメンバーに怒号し続け、客は全部退出、その日のステージはもちろん、ライブハウスは当面営業中止とせざるを得ない。

普蕭は真摯に謝罪し、弁償を約束し（眞神村の天平家の人間である普蕭が言うことなので八木沼もその実行性を信用した）、8時にBSを出た。

暗い路地で叭羅蜜斗が大激怒。

「もううんざりだ。オレは辞めるぜ。こいつには付き合ってらんねーっ！ あつたりめーだろ、わかるだろっ、当然だろがっ！

この発狂ヤロー、てめー何したかわかってんのか、バンド皆が当分演奏できなくなっちゃったんだぞ？ 若い無名バンドの味方してくれてる八木沼さんに何千万以上もの凄い損害を与えちゃったんだぞ！ くたばれや、クズ野郎っ！」

イタルは無表情だった。

「そいつ。So What? 小せえ野郎だな。パンクにや向いてねーぜ。鹹シベになって大正解だったな。ふ」

「て、てめー、何だと、このヤロおー」

普蕭は十数人に囲まれていることに気が附いた。暗がりに浮かぶシルエットから他のバ

ンドの面々であることがわかった。

「おい、アヴァンギャルド気取りカリスマ気取りか、クズ野郎ども。顔貸しな」



裏路地の狭く暗い峡間で袋叩きになって、反吐と生ゴミの腐汁が浸み込んだアスファルトに頬ずりさせられた翌日、v v w wのブログは大炎上した。

ベ裂でさえ登校が憂鬱だった。顔が絆創膏だらけでもあるし。

「おい、イタルを見たか？」

昼休み。腕を吊った普蕭は廊下で会った叭羅蜜斗に訊いた。叭羅蜜斗は喧嘩慣れしているので怪我が少ない。

「いや。」

あのヤローのことなんぞ、考えたくねー」

「そうか。」

スマホに電話しても留守電になってしまっただ：」

放課後、ベ裂が普蕭に言う、

「いなかったな。とうとう来なかったんだ。

まさかあいつが：ちよつと考えられないんだが。俺も彝之家、親戚だからな、家族に後で訊いてみるぜ」

数日、いや数週間、イタルは姿を見せなかった。その無責任で卑怯な逃避行動に非難が集中しまくった。むろんネット上のことだが。

「こんなことになってるなんて知りもしねーんだろな、あいつ」

久々に駅で会った叭羅蜜斗がそう言った。バンドは事実上の解散状態だ。

普蕭は考えた。

「いや、イタルもネットは見ているはずだよ。しかし気にしてないか、むしろ望むところってことなんだろう」

「そうだな。ありそうな話だ。だいたい、家にいればネットぐらい見るよな」

「いや、自宅にはいないようだが」

「行方不明か？」

家族には訊いてみたのか!？」

「むろんだよ。」

いや、ベ裂が訊いてくれたんだが。

イタルの家族に尋ねても、またぶらりとどこかへ消えてしまったよって言うばかりのようだ。

でもBSの件はイタル本人から聞いているらしい。弁償費用のことを八木沼さんに電話しましたとイタルの母親が言っていたよ。八木沼さんは刑事事件にする気はそもそもなかったらしい。

ほんと、いい人過ぎて申し訳ないよ。警察へも連絡してないみたいだ。

それより事件のことを親に言ったときのイタルの言い方がいかにも彼らしくて。『吃驚させちゃ悪いから教えておく。ふ。俺にもまだ人間的感情があるらしい。ち、ざまあ見やがれ。ぐだぐだ言わずに三千万貸しな。ふ。弁償せず踏み斃し逃げるか。諸行は無常だしな。あゝ、海賊船に身売りして稼ぐでもいい。死ぬほど辛いだろうさ。クールだぜ』

って感じだったらしい」

「ちつ。生きる資格もない穀潰しだぜ」

「彼には孝行とか社会道徳なんて数字の羅列ほどの意味もないんだろうな」

「親が甘やかし過ぎなんだ」

「それでもないだろう。」

あの家はかなり厳しいはずだ。何てったって葬之家だからね。

イタルみたいな、よく言えば超越的な、ああいう人間が出るのも、そのせいなんだろうなって思う。

べ裂だつて幕末の脱藩浪士みたいな雰囲気じゃないか。きっと、葬之家の血がそうさせているんじゃないかって、僕はよく思うんだよ」

幾日かが過ぎ、ある土曜の夕、古いハイラックスに乗った若い男が普蕭を訪ねて彼の家に来た。南方系のくつきりした眼に、髪も髯もカールしていて日に焼けて痩せ過ぎで、Tシャツにビンテージ物のリーヴアイスの若い男だ。

「白舟寛太嘉^{しらふねかんたか}つて者です。楽器を車に積んで全国を回っていたんです。

ユーチューブ見て来ました」

「ユーチューブ？」

「ツイッターで紹介されてたんで、見たんです。

ブラウン・シュガーでのライブです」

どうやら誰かが動画を撮っていて、ユーチューブにアップしたらしい。ネット上は叩きの嵐だが、肯定的な人もいるのか？ それとも晒し者にしてるってことか？

ちなみに寛太嘉はを見る限りにおいては肯定派らしい。

「あなたが来た意味がよくわからないんだけど……」

「いや、自分もよくわからないんです。

ただ凄いな、どんな人なのかな、って思っ

た。八木沼さんのところへ行ったら、天平家の君の名を教えてくれて」

聞けば彼は十九歳で二つ年上だ。白舟という姓は眞神の古い姓の一つで、畝邨村の出身ということだった。

「せっかく来てくれたのはうれしいんだけど、あの一件以来解散状態なんだ。

イタルも行方不明だし」

「他の音源や動画なんかありますか？」

「練習中の録音や録画はあるけど。そんなものでいいのなら。

じゃ、スタジオに」

寛太嘉は二時間ばかり色々観たり聴いたりし、

「実は自分はインターネットとか詳しくないんで、今度、妹を連れてきます」

「何のために？」

「この音や映像をアップしたいんです。

いや、もしあなた方がよければ」

白舟まあやは十四歳、普蕭らの三コ下で、畝邨中学校の二年生だった。兄とともに翌土曜日にやって来た。

「ネット環境は整っているから。どうぞ。好きに使っていいよ。データは全部このPCに入ってる」

普蕭は簡単にそう説明した。少女は黙って頷き、持参したノートパソコンと普蕭のノートパソコンを立ち上げ、作業にかかった。痩せ過ぎの浅黒い幼い体、垂直の長い黒髪、切り揃えて眉を隠す前髪の下、眼が細く切れ長で、七月も近いというのに少女は長袖と長いスカートを穿いていた。

「愛想のない奴なんです」

寛太嘉がおどけた苦笑でフォローした。

作業の間、へ裂がギターを弾き、寛太嘉はコンガを叩いてセッションした。合間に普蕭がまあやに説明する。

「この曲はほぼ完成しているけど、まだタイトルがないんだ」等々。

今日 v v w の画像や動画や録音が数多く残っているのは、彼女の功績であると言っても過言ではないだろう。

寛太嘉がメ裂に訊いた。

「もうやらないんですか」

メ裂は窓の外の青い空を見上げた。

「いや。」

イタルが帰って来たらまたやるさ。

「どうかたちであれ」

「そのときは協力しますよ。どんなことであつても」

七月の初旬、久々に登校してきたイタルは顔を包帯でくるんでいた。

誰もが怪我が長引いているのだと思った。

イタルは教室で包帯を解いた。

驚愕の声が上がる。

鯨しやちほしのように尾を上うに、頭を下したに、溯縦さかたつ蒼碧紺青の龍神が精緻に彫られていた。

和彫わぼりの刺青。

その鱗一つ一つの細密さは星のように鑲められた貴金貴石のように燦煌し、喩えようがなく、言語を絶していた。イタルは頭髮の左半分を剃っている。

青き神龍の尾が左耳朶下に始まっていた。それは鯉の鱗をびっしり備え、黄河のようにうねり、左耳尖の後辺りで二つの輪を為す。顱頂左半分に左右の後脚が五爪ごそうの鷹爪を広げていた。掌は虎だ。

蛇身の胴体を捻りながら輪を為しつつ頭頂左部をぐるりと繞り、蜃めく（蜃とは龍の一種で、みずち（虬）とも言いが、ここでは分別する）なる腹を見せ、また鬚靡く背を見せ、額とを亨り、左眉を断ち、左上瞼から左下瞼に於いて左右の前脚を広げ、熊掌と鷹爪を開き伸ばして威嚇する。



首は左頬を稲妻裂くように伸び、左顎を廻って喉仏の左に鹿の角、駱駝の頭、牛の耳、赤い鬼眼（兎眼）を憤神のごとくかつと見開き炯らかに赫かせ、長髯を流旗のよう雲気に靡かせ、爛れ熾える炎のような口を裂くよう開けて牙を見せていた。しかし喉下にある一尺四方の逆鱗は見せない。

青龍の刺青を、しかも顔面に。顔の半分を覆う刺青。

誰もがいくら何でもそこまではやるまいと思うようなことをイタルは軽々と遣つて退

け、平然と、いや、平然と言うより、畜群を憐れむかのような眼差しで、皆を見ている。級友ら全員が刮目し、眼を睜みはつた。あ然として誰も何も言えない。凄過ぎて何も言えない。担任教諭が教室に入ってきた。

いつもどおり教壇に立つ。

「おい、おまえたち、始業のチャイムは鳴ったぞ。着席しろ」

生徒たちは席に着いたが、イタルは背を向けて立っていた。

「おい、犇は之か。

本当におまえか。

そんな髪色の奴は、おまえしかいない（髪型はだいぶ変わったが）からすぐわかるぞ。やつと来たのか。皆で心配していたんだぞ。……なるほど。おまえが来たからか。

それで皆が着席していなかったのか。病気だったと聞いていたが、ご両親が詳しいことは教えてくれなかったんだ。

いったい、どうした？」

イタルは振り返った。

「うわあつ！ 何だつ、それは！」

岡崎教諭は腰を抜かした。どう考えても化け物でしかなかった。

一時限目は自習となり、イタルだけ英語教科室に呼ばれ、小さな丸椅子に座らされた。

「わかつているのか。18歳未満のおまえが罫を彫るのは条例違反だ」

「わかつてるよ」

「それは本当に彫り物なのか、絵の具じゃなくて」

「見てわかんねーか？」

よく教師になれたな」

「一生そのまんまなんだぞ、そんなんじや、どこにも受け入れてもらえないんだぞ、よく考えたのか。おまえ、本当にとんでもないことをしちゃったな……」

犇は之、おまえはいつまでそうやって生きていくつもりなんだ」

「長くは保たねーだろな」

「わかつているのなら、そろそろやり方を変えろ。」

先生の言っていることわかるな」

「わかつちやいるがね」

校長や教頭と相談の結果、親が校長室に呼ばれ、期限を設けない自宅謹慎となった。



神中洲のMacに集合した。来る途中すべての人間が驚愕と嫌悪と畏怖と蔑みで顔を顰め、呆れたようにイタルを眺めた。

「やってくれたぜ。このクズ野郎。もう怒る気にもなんねー」

叭羅蜜斗がアイスコーヒーのストロー咥えながら言うといタルは、

「つまんねーな。パンク野郎ってのはな、いつでも怒ってるモンだぜ」

「くっ」

鼻先で嘲笑う叭羅蜜斗。路を歩いていても店内にいても、誰もがイタルを振り返り、誰もが瞠目し、それから眼を合わせないよう凝視した。ヤンキーどもも絡み方がわからないようだった。

「どこでそんなもの彫ったんだ」

ベ裂が面白そうに訊く。

「知り合いさ。おれには芸術家の知り合いが多いのさ」

「確かに腕は良いみたいだ。凄く美事だ」

普蕭は思わず頷く。

イタルは面倒臭そうに言う、

「ンなことよりか、次のライブをしようぜ」

「メジャーになりたくないんじゃないのか？ て言うか、オレたちを出すところなんぞ、この辺りじゃもうないぜ」

「別にメジャーだっていいさ。一々気にしないでいいぜ。燃え尽きたいんだ。Very Very Well-done にな。世間なんざかんけーねー」

ベ裂が腕を組んだ。

「路上ライブってことか」

まあ、誰も見てない山ん中でもいいけどな、俺は」

イタルが頷く。

「どっちでもいい。オーディエンスなんて糞だ。いてもいなくてもいい。おれは勝手に燃えて、勝手に燃え尽きるだけさ。彗星みたいなもんだ。」

ふ」

「とりあえず公園でやろうか。薙久簔町の中央公園辺りでどうかな。山の中ってのは最後の最後にしよう」

普蕭がそう言うといタルは、

「おれもそれは最後に取って置くつもりだ」

と、ぞつとするような微笑を浮かべて言った。

「普蕭、叭羅蜜斗、メ裂、おれはもつとオリジナル曲を作っておきたい」

それは理に適っているように思えた。

四人は数週間、普蕭のスタジオで作曲に努め、その様子を寛太嘉やまあやが録画し、ネットにアップした。その頻度は次第に増えていったが、頻繁に来るのは兄ではなく、妹の方だった。

まあやは最初、怖がるような様子でイタルに近附こうとしなかった。

和彫りを顔面に施した形相は凄まじく、もし幼いこどもだったら、すぐに泣き出してしまいそうな強烈さだから、彼女が敬遠したとしても不思議ではない。

しかし兄は気附いていた。

妹の憧憬の眼差しに。

無感覚で、到底、恋愛感情などというものには縁のなさそうだった、蒼白く痩せ過ぎの彼女に、情炎のようなものを感じた。その眼はイタルに近附くすべてのものに嫉みと憎悪の暗鬱な黒い焰を上げた。

「兄ちゃん」

あるとき、まあやは切羽詰まったように言った。

「イタルを止めさせて」

「止めさせる？ 何をだ？ ライブか？ それは、気持ちはわかるが無理だ。そうさ、兄ちゃんにはおまえの気持ちがわかっていたぞ。でも、イタルはああいふ男で、それが彼の生命なんだ」

「違うよ。」

兄ちゃんにはわかっていない」

「何の話だ？」

「イタルは、イタルはね、死んじゃうかもしれないんだよ」

「何言ってるんだ。死ぬって、何だ、唐突に。莫迦なこと言ってるんじゃない。さあ、今日はどう帰るよ」

「ねえ、約束して。今度ライブするときは必ずあたしを呼んで。あたしに声をかけて。絶対あたしには知らせて！ 絶対だからね、お願いよ！」

やがて夏休みになると、龍臥堂（普簫のスタジオ）を詣でる人間が増えた。

龍臥とは平衛隆臥が自分の名は龍臥の音読みから転じて隆臥となったのだと話したときに、龍臥蜜斗が、ここもまさしく龍が天を狙って臥している場所だ、と言ってその名が決まった。龍を附けたのは、単に文字の形が三叉戟やカップに似ていて気に入ったのと、プサイという読みが何となく面白かったからに過ぎない。

話の順序が逆になったが、集まったのは私立真神高の同学年の仲間たちだった。どれもこれも真神の旧家出身、この地ならではの濃い奇人変人揃い。天易真兮、天の哥舞伎、炎春慶、白舟大楽、そして先に名の出た平衛隆臥である。

寛太嘉が従兄弟の大楽を呼び、大楽が春慶と哥舞伎を誘い、その翌日、哥舞伎が隆臥と真兮に連絡した。

真兮は片眼鏡（モノクル monocle）にサテン地のミリタリーコート（房飾りや飾り紐のある、欧州軍隊の礼服のようなもの）を着て魔法使いの尖り帽子を被った奇人、幼少時からニーチェ、ハイデガー、デリダなどの哲学を愛好する少年で度々イタルと議論し、Lyricを練り上げる際に多くのインスパイアを与えた。また彼はミキシングに才能を見せる。

大楽がドラム、哥舞伎がヴォーカル、春慶がギターで彼らはREALというバンドを組んでいた。v v wに協力し、多重録音せずとも複雑なアレンジをこなすことができるようになった。

哥舞伎はその名のとおりかぶきもの（傾奇者）で、長じては花魁の衣装をガウンのように羽織って街を闊歩する若者となる。彼の個性的なヴォーカルはイタルの狂熱のヴォーカルと絡んだときに摩訶不思議な相乗効果を齎らした。魔薬に痴れた邪教の狂躁秘祭のようであった。

そんなときは寛太嘉のパーカッションが異常に邪教的雰囲気盛り上げた。『修羅の戯』という曲はそんなセッションの中で生まれた。イタルはこの曲のLyricを何度も書き換え、真兮と深夜まで議論する。

隆臥はニコ下で、特技は特になかったが、アコースティック・ギターで少し参加した。彼は彝佐早蕨という彼の一コ下の少年を連れて来た。

いつも洒落た格好の早蕨はPCやネットに詳しく、まあやを手伝い、彼が撮影を行った。隆臥はそれを手伝った。

ある日、唐突にイタルはライブの計画を練り始めた。大きな紙に薙久簀神中洲の中央公園の地図を精密に書き、そこに細かな書き込みを始めた。哥舞伎や大楽や炎たちと何度も

打ち合わせた。

「おい、何てこった。意味わかんねー。」

奴が来るぜ」

窓の外を見ていた叭羅蜜斗がそう唸った。

黒過ぎる漆黒の髪。全身が真っ黒な服装。眼窩はマスカラの厚塗り。

RZDの天之翳廊だ。陰々滅々とした昏く^{くろ}玄い異様なオーラは相変わらずだった。

イタルが進み出る。翳廊がかすれた声で、

「冥府の奥底から弔いに来てやつたぜ、死人」

「ふ。」

負け惜しみを言うためにわざわざ来たのか？ まあ、あのコンペはおまえの勝ちだったが、肝心のライブハウスが使いもんにならなくなっちゃったんだよな。

おれがぶっ壊して」

「BSは今週から営業してるぜ。」

吾^{おれ}はどっちにしろ、あそこで演奏する気はさらさらない。いつか喰らい尽くしてやるよ、

イタル」

「気紛れなクズ野郎だぜ。生きていても何の意味もない」

「おまえに言われれば光栄だ。ギネスに載れるぜ」

二組の双眸は強く赫^{あき}めき燦めく。濃く鮮やかな炎のように。

「く。」

じきに葬ってやるさ。どうせ、おまえは生まれながら死んだ野郎だ。この世に永くは居られねー。」

「ふ。」

間抜けな奴ってのは、どこまでも間抜けなもんだ。もう手遅れだぜ」

翳廊の眼がじっとイタルを見続けた。普簫らには長い時間を感じられた。

空茫とした翳廊の眼に砂漠のような哀切が泛かんだように見えた。

「そうか。」

仕方ないな」

彼は去った。イタルは冷たい微笑を浮かべた。



状況がよくないにもかかわらず、意外に多くのことが順調に進んでいるかのように思え

るそんなときだ。

BSライブのユーチューブ動画が学校側に知られ、イタルは退学となり、^ズ裂、普蕭、
叭羅蜜斗は一週間の停学処分となった。

「曲作りに集中できるぜ。」

おまえらだって少し夏休みが早くなったようなもんだろ」

イタルはそう言つて微笑した。

BS動画は少しずつ知られ始める。

生前は晒して揶揄し、叩きのネタにするためにコピーされたりリンクを貼られたりツイ
ッターで拡散されたりしたが、彼の死後はイタルの存在が神格化・伝説化し、動画も聖者
の奇蹟の記録のごとく崇め奉られ、終には^{ぼろ}檻樓くてちやちで三流以下だった八木沼のライ
ブハウスまでも聖地の一つとして詣でる者たちが現われ始めるようになるのであった。



中央公園の西側には狭い国道が走り、その南端に小さな電気室がある。一箇所だけ夏枯
れした梢を払いつつ近附くと、小さな制御室が附属しているのがわかる。公園の南側にあ
る大噴水盤の水をコントロールする仕組みになっていた。

扉に南京錠があつたが、引つかかっているだけで鍵としてかかつてはいない。

「好都合だね」

大型バイク二台に工具などを積んでやって来た大楽と哥舞伎は隠すように荷を降ろし
てから制御室に入った。

「思ったとおりだよ。タイマーによる自動コントロールだ。本体は役場にあるけれど、現
地での手動操作もできるようにこの端末機があるんだ……」

哥舞伎が口をはさむ。

「要するに制御可能だつてことだ。ある意味、気に食わないね。出来過ぎだよ。でも、ま
あ、いいさ。じゃ、ここを電源にしようぜ。ミキシングやライティングのために」

外に出て、さらに二人は気がついた。電気室近くの公園入口にある車埋め込み固定式で
はない。簡単に手で外せた……哥舞伎が苦笑いする。

「へ、本当に出来過ぎだね。ま、公園メンテナンス用の車を入れやすくしているんだ、つて
ことにしとくか。裏口つて言うか、家で言えば勝手口みたいな部分だから……」

夕方になると、隆臥と早蕨と炎がやって来た。

寛太嘉がハイラックスで運んで来たミキサやライトなどの機材を人目につかないよ

うに降ろして運び、公園の南東の繁みの中に配置し、カモフラージュで隠す。東側は川で、草藪が多く隠すには都合がよかった。

五人は日が落ちてから慎重に照明のセッティングを始める。



侘びしい眞神の農村風景。

真緑の水田。風に戦ぐ。そよ

鬱蒼とした杜。ぽつねんと小さな納屋がある。

普蕭は家から離れたそこに農作業道具などを運ぶ軽トラックが鍵付きで仕舞われているのを知っていた。7時頃はその辺はもう人影など出ようがない場所だ。イタル、普蕭、叭羅蜜斗、ベ裂、寛太嘉の5人は荷物を積んだ。

それは凄絶な、彼らの最後のライブへと向かうためであった。

その数時間前、夕方独りで帰るまあやが誰も見ていないときにひしつとイタルの腕をつかんだ。

「イタル、あたし、帰るね」

「ああ」

「イタル」

「何だ」

「・・・うん。何でもない」

「そうか」

「イタル、ねえ」

「あ？」

「また明日ね。」

必ずよ。

また明日」

イタルは微笑した。少し瞼を伏せる。そしてそんな自分を嘲るように、

「ああ。」

わかつてる。

必ず明日は来るぞ」

「そうじゃなくってー!」

「ああ、そうさ」

そう言っってからやや間を置き、

「明日もおれたちは会えるぜ」

「約束だよ」

まあやはすかさずそう言った。

「わかった。」

ふ。

まるでおれは死ぬみたいだな」

少女は俯いた。幼い唇を少し噛んだ。

イタルは皮肉な笑みを浮かべた。

「大丈夫だ。」

死んじまえばすべてがなくなる。すべてがなくなる、すらない」

「イタルっ！」

まあやはさらに何か言おうとしたが、

「まあや、早くしろ、準備は出来てるぞ」

兄の声だ。

駅まで送るためにハイラックスの運転席で待っていた。イタルが夕焼けを見ながら、

「寛太嘉が待ってるぜ。」

早く行けよ」

まあやは一瞬息を強く吸い込んだが、背を向け兄のもとへ向かった。向かう途中、一度だけ振り返った。

「イタル、またね」

彼は鼻尖で冷笑しただけだった。

車に乗っている間中、兄は一言もしゃべらなかった。少女は不安を覚えた。名状し難い緊迫を感じたからだ。

「お兄ちゃん」

兄はその呼び掛けに応えなかった。

妹は黙って返事を待つ。

さてその晩、様々な機材を運び込み終わる頃、イタルがそつと10リットル入りのポリタンクをいくつかさつと積んだ。

催眠術にでもかかっていたかのように不思議と誰も気にとめなかった。それは家を決意

した若き釈迦が夜、秘かに王城を抜け出したことを誰も気がつかなかったという故事に似ている。



ラスト・ライブの記録は遺されていない。

まあやを連れて行かなかったから記録する者がいなかったのだという説が一般に言われるが、それだけでは納得し難い。

録音や録画ぐらい誰にでも出来る。

公園のあちこちに昼間のうちから、密かにミキサ―を運んだり、照明を葉に隠すように木に掛けたり、噴水そのものが光の柱に見えるほど噴水盤のふちにたくさんライトを固定したり、噴水の土台の周囲に植え込みに隠しながら、巧みに設置することができたのだから、録音や録画の用意など、十分できたはずである。

しかもv v wは活動期間や演奏回数割には尋常ではない数の音や映像が遺されている。

ラスト・ライブに限ってそれらが遺っていないのは異常な事態であるとも言える。

スタジオでの作曲や演奏の成果であり、入念に事前準備されたラスト・ライブの撮影や録音にまったく執著していないのは、なぜか。少なくともイタルは強く執著しても良いはずであった。

彼にはラストであることがはっきりわかっていたからだ。

それともそうではなかったのか。実はそうなのかもしれない。

いまとなつては誰にもわからないし、わかりようもない。

だが、ラスト・ライブがどのようなものであったかを想像することは関係者以外の人間においても不可能ではない。

まず普蕭や叭羅蜜斗や真今らがネット上に書き込んで言及し、イタルについて論じているため、演奏した曲名が公になっているからである。曲名さえわかればその曲の動画は簡単に検索できる。

動画の多くはイタルが退学となり、他三人が停学となつてその後そのまま夏休みに突入した期間、三人が普蕭の家のスタジオに寝泊まりしながら籠もり、作曲編曲と録音録画に明け暮れていた時期のものだ。

その功績の多くはまあやにあるといいだろう。

彼女は百数十時間の動画を録画した。そのために夏休みをすべて捧げた。だがそれによ

って偉大な記録のすべてが現存し、すべてがネット上にアップされ、多くの人にコピーされ、トータルでどれくらい閲覧されているか確認のしようもない、という慶事となったのである。

特にラスト・ライブで演奏された三曲については同じ曲のスタジオ録音版が遺されていて、それがネット上にアップされているので、様々な人が自分のブログにリンクさせたり、コピーして再アップしたりするので、ほかのv v wの曲に比べ、圧倒的に多く遺されている。すなわち誰でもいつでもどこでも簡単に検索し、閲覧することができるのである。

たとえば通勤や通学の電車の中や昼休みや移動中やトイレの中でも、スマートフォンなどで即座に見ることができるので。

見ながら普蕭らの記述を読めばラスト・ライブの様子が臆気ながらも、容易に空想できるだろう。

実際、その二次的な体験からラスト・ライブを論じる者も多い。それはイタルの行動、その最期についても及び、様々な哲学的な議論が湧き起こった。映像資料が多い中、ラスト・ライブの資料がないことも諸説を生んだ事象の一つだ。

いずれも正解などわかりようもない。

ただ、それらの映像や友人らの記録・言及を見ると、v v wが、特にイタルが作曲や楽曲作り、演奏というものに異常な執着を見せて寝食も忘れていたことが窺える。

一つのアイデアや楽曲をいくつもの（大して差異のないものも多かったが）パターンで作った。

また、音楽の法則を無視した途方もないアレンジ（しかしさほど斬新でもアヴァンギャルドでもなかったが）基礎知識もないのに分数コードをいくつも作ってはそれらを組み合わせることに没頭した。

あるいは、普蕭の家のスタジオに置いていたMTR（マルチトラック・レコーダーMulti Track Recorder）や、DAW（デジタル・オーディオ・ワークステーション Digital Audio Workstation）を使って録音やミキシングを行い、音声トラックのバランスや音質や定位（ステレオ・サウンドの空間的な配置）を様々に変えた。

また、多重録音やサンプリングや昔風の逆回転録音や様々な音楽以外の音をコラージュのように貼り合わせるなど、ライブでは再現演奏不能な曲をいくつも創った。

食事も摂らず睡眠も取らぬときも頻繁で、妄執ぶりは尋常ではなかった、という記述が大袈裟ではないことを彷彿とさせる内容だ。

囚われない展開、メロディ、演奏法。新しい音色。リアルでヴィヴィッドなインパクトのあるサウンド。くつきり存在性のある音。

「人は結局、リアルさを求めているのだ。」

それは新しい刺激に多々ある」

イタルはそう言っていたという。

後に普蕭は語った。

「彼は美しい曲を嫌っていた。」

ピカソが『美は脅し文句に過ぎない』という言葉を残しているそうだが、彼はそれを好んでいた。メロディアスな曲やラブソングを唾棄すべきものと考えていた。潤いのある曲を邪道だと考えていた。

イタルが好きだったのは即物的な、物質感のある音だ。彼は書くときはよく音触と書いていた。手で触られるような存在である音色のことだ。

情緒のない、非情で無慈悲な音質、ドライな音。ただくつきりとした、晰らかで鮮烈な、

「存在」という考概における定義の本質的真髄をなす実存的な基礎（イタル自身の言葉だ）——のような音。

『The Full Metal Cool』という曲があつてイタルはそれを完成しなかったのだが、異常な執著を見せていた。サウンド・コラージュで、リズムもメロディもなく、音楽らしい音楽のない曲だったが、その無味乾燥さに凄く執念を抱いて取り組んでいた。

最初は工場や工事現場の音や、都市部の騒音などを熱心に集めてコラージュしていたが、何十年も前にアインシュテュルツェンデ・ノイバウテン *Einstürzende Neubauten* などのインダストリアル・ミュージックやノイズ・ミュージックがあつたことを知ると、もっとドライな非情な音質を創作して組み上げるようになっていったんだ」

彼が（正確に言えば彼らが）サウンド・コラージュと呼ぶものはいわゆるミュージック・コンクレート *musique concrète* のことで、人の声や街の騒音や自然の音や電子音等々を録音し、加工再構成して創る音楽のことだ。様々な音を貼り合わせることから彼らの間ではコラージュで通用するようになってしまったらしく、いわゆる音楽のコラージュ（音楽の引用）とも別物だ。

ハードな曲、金属的な無機質なサウンドが多い中、まったく異なる曲が一曲だけある。その思い出をへ裂が語ってくれたことがあつた。

ピアノみtainな雨の降る日だったという。

「俺がスタジオに行くときと相変わらずイタルがいた。

他の連中はそのときはいなかった。家に帰っていたんだろうな。普通の人間は眠ったり、飯を食ったりしなくちゃいけないからな。あいつは」

ベ裂は欣然と笑んだ。

「まるで怨霊みたいだったよ。創り出す音はますます狂気に走っていた。

たとえば『Rebellion that rebels against rebellion』だ。暗黒的だ。

曲としては平凡なデスメタル Death Metal 系だったが、イタルのヴォーカルの速度と言うか疾走感、失喪感とも言うべき常軌を逸した性急な歌いっぷり、狂滅的な焦燥性による自殺行為（これはイタル自身の言葉だ）、自己暴動（これもそうだが）的な無意味さ、無為徒労で無味乾燥な感覚、もう正気の沙汰じゃなかったぜ。あいつの好きな言葉で言えばまさに『大死に』だった。

しかも狂犬病のね」

ベ裂は遠い眸をした。

「そんなあいつがあの日に限っては違っていた。

そう、雨の日だったんだ」

スタジオの隅にイタルはギターを抱えて爪弾きながら、しゃがんでいた。

「スローな曲だった。

呟くように歌っていてね。Lyric はよく聴き取れなかったが、まるで讃美歌のような曲だった。不思議な気持ちになったよ。あいつそんな曲を作るなんてね。俺は黙って見ていた。あいつは何度か繰り返し返していた。

見ているうちに Am、F、G、Am と Am、F、G、C、E、F の繰り返しだったことがわかった。

サビ（正確に言えば「触り」と言うべきもの。盛り上がるどころ。本来は浄瑠璃の口説き、歌謡的な部分のことで、聴かせどころの意）らしきところが F、G、C、E だったことがすぐにわかったよ。

つまりそれは『この大地に永遠の平和を』だったんだ」

「なぜイタルはあの曲を作ったのでしょうか。彼は何か話していましたか」

「いや。

何も言わない。たぶん、反対の反対は賛成、みたいなことじゃないのかな」

叭羅蜜斗はそれについてこう言った、

「奴は囚われてないからな。心の赴くままに作っていただけなんだ。
雲みたいにかたちのないものだったんだよ。センチメンタルな気分になればセンチメン
タルな曲を作るのさ」

しかし普蕭の意見は違っていた。

「センチじゃないよ。断じて違う。人道的な曲だ。正義の歌だ。見てくれ」

彼はそう言うと、プリントされた Lyric の上にコードを鉛筆書きで振ったしわくちやの
紙を出してきた。

Am	F	G	Am	
ただ	欲しいものは	一つ		
Am	F	G	CEF	
あたりまえな	暮らしの	ある世界		
	G	C	E	
たとえば目の前で	家族を虐殺されて			Am
F	G	C		
泣きまどうこどもたちの	いない世界			
Am	F	G	Am	
いま	祈る	言葉は	一つ	
Am	F	G	CEF	
この	大地に	永遠の	平和を	
	G	C	E	
たとえ虚しい	夢で	あっても		Am
F	G	C		
他にどんなマシな	生き方がある			
F	G	C	E	
この	大地に	永遠の	平和を	
F		G	C	Am
二度と終わることのない	平和を			
(間奏)				
F	G	C	E	
平和	平和	平和が	欲しい	
F	G	C		Am
本当の人間の	世界を			

普蕭は強い眼差しで私を見据え、こう言った。

「これは正統なる真神の精神だ。古来、言われ続けている、
『義しきと以^{おも}うを爲せ』をま
つとうしている。そして反体制のメッセージがある。ほら」

彼はもう一枚の紙を出した。なぜ二枚に分かれているのか、聞き忘れか、もしくは憶え
ていない。たぶんただ A 4 判 1 枚に収まらなかったただだろう。はつきり思い出せないが、
A 4 一枚にきっちり書き込んだ上で、次葉に続いていた、ように記憶しているからだ……
「この Lyric の続きを見れば明らかだろう。彼の頭の中に具体的ないくつかの国名があっ
たに違いないと僕は確信する。たとえば、ソマリアやウガンダ、シエラレオネや南スーダ

ン、コンゴ(民主共和国) なんかのアフリカ大陸のいくつかの国だ。イタルはそれらの国を念頭に置いていたと思う。ま、僕の個人的な見解だけだね。

彼はかつてこう言っていた。

“何を歌おうが現実とは変えられない。現実って何だ？ いったい何だ？ 答がない。

ただ『ある』だけだ。

草が枯れて折れるように何百万もの人間が惨たらしく殺戮されていく。それを神が与えた試練だという奴もいるが、無理があるだろう。いささか度が過ぎていくからだ。

どう考えても事実は説明がつかない。自然の摂理があるだけだ。物的法則の世界だ。ただし、すべてが自然のあるべき営みや摂理であるとしても、それに刃向い闘うこともまた自然の営みの一つだし、摂理なんだぜ。

だが、どっちにしろ、くだらねえ。

屁理屈より、おれが感情の真の神なる奥の真奥からそうしたいって思うんなら、それが爲すべき義しいことなんだ。問いただしても意味がない。問いたすことが正しいかどうかすらわからねえんだからな。ふ。そう思うぜ”

ってね」

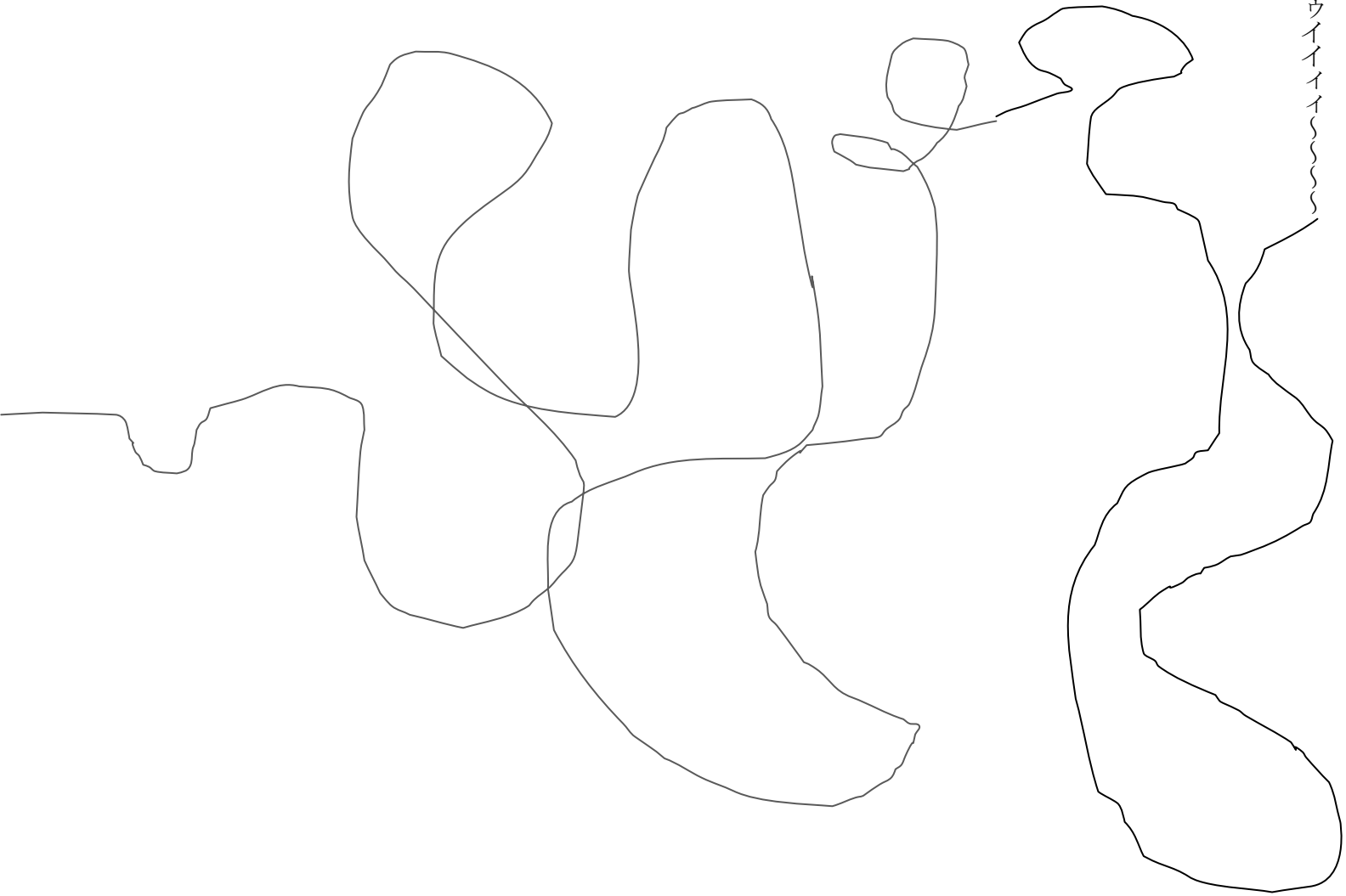
Am F G Am
ごらん あの泣く子たちに どんな罪があったの？
Am F G CE F
教えて あの子たちなら どんな罪が犯せたらうか？
G C E
この怒りと この哀しみを
F G C Am
すべての愚かな 権力者たちへ

この 大地に 永遠の 平和を
二度と終わることのない 平和を

平和 平和 平和が欲しい
本当の人間の 世界を

F G C E
この 大地に 永遠の 平和を
F G C C
真実の 世界を
F G C C
本当の人間の 世界を
F G C Am
哀しみのない世界を

ギツギギツギーユユユツーギュー。ギツギギツギーユユユツーギュー。
ギツギギツギーユユユツーギュー。ギツギギツギーユユユツーギュー。
ギツギギツギーユユユツーギュー。ギツギギツギーユユユツーギュー。
ギツギギツギーユユユツーギュー。ギツギギツギーユユユツーギュー。
ギユウイイイ~~~~



弓で弦をかきむしる不快音が響き渡る。不気味な緊張感がさらに高まる。真々がシーケ

ンサーを内蔵したシンセサイザーを操作し、予め記録された音のデジタル・データを再生する。それは嵐を孕んだ風音のような緊張感でどんどん膨張していく異様なノイズ。

緊張の頂点。大砲のような爆音とともに、デスメタル系の曲『非』が噴火のように疾走する。その音の大氾濫洪水は樹木を薙ぎ倒すかのようだった。噴水が噴き上がる。ライトが四方から水柱を照らし、光の炎のように燃え輝かせた。イタルはギターを投げ置き、マイクに向かってHarpを迸らせる。真今の操るシーケンサーが物凄い音の氾濫土石流で地を揺るがす。イタルがシャウトする、

「ナイっ！ナイっ！ナナナっナイっ！ナイっ！ナイっ！ナナナっナイっ！ナイっ！ナイっ！ナナナっナイっ！ナイっ！ナイっ！ナナナっナイっ！ナイっ！ナイっ！ナナナっナイっ！ナイっ！ナイっ！ナナナっナイっ！ナイっ！ナイっ！ナナナっナイっ！」

愛もない。恋もない。家族も平和もない。ナイ。正義もない。真実ない。空っぽない。ナイっナイっナイっナイっナナナっナイっナイっ！」

「ああぬあいつつあああああああああつ！」

絶叫の後ヴォーカル、ギター、ベースはブレイク。ドラムのみが烈しく連打するも唐突な沈黙

を牽き裂いて突如イタルのヴォーカルが魂魄迸らせ始まり、その凄まじき勢い、言葉の最後と次の最初が重なるかの如き速さ、狂おしいまでの焦燥的な性急さで、摩訶般若波羅蜜

多心経をラップする、

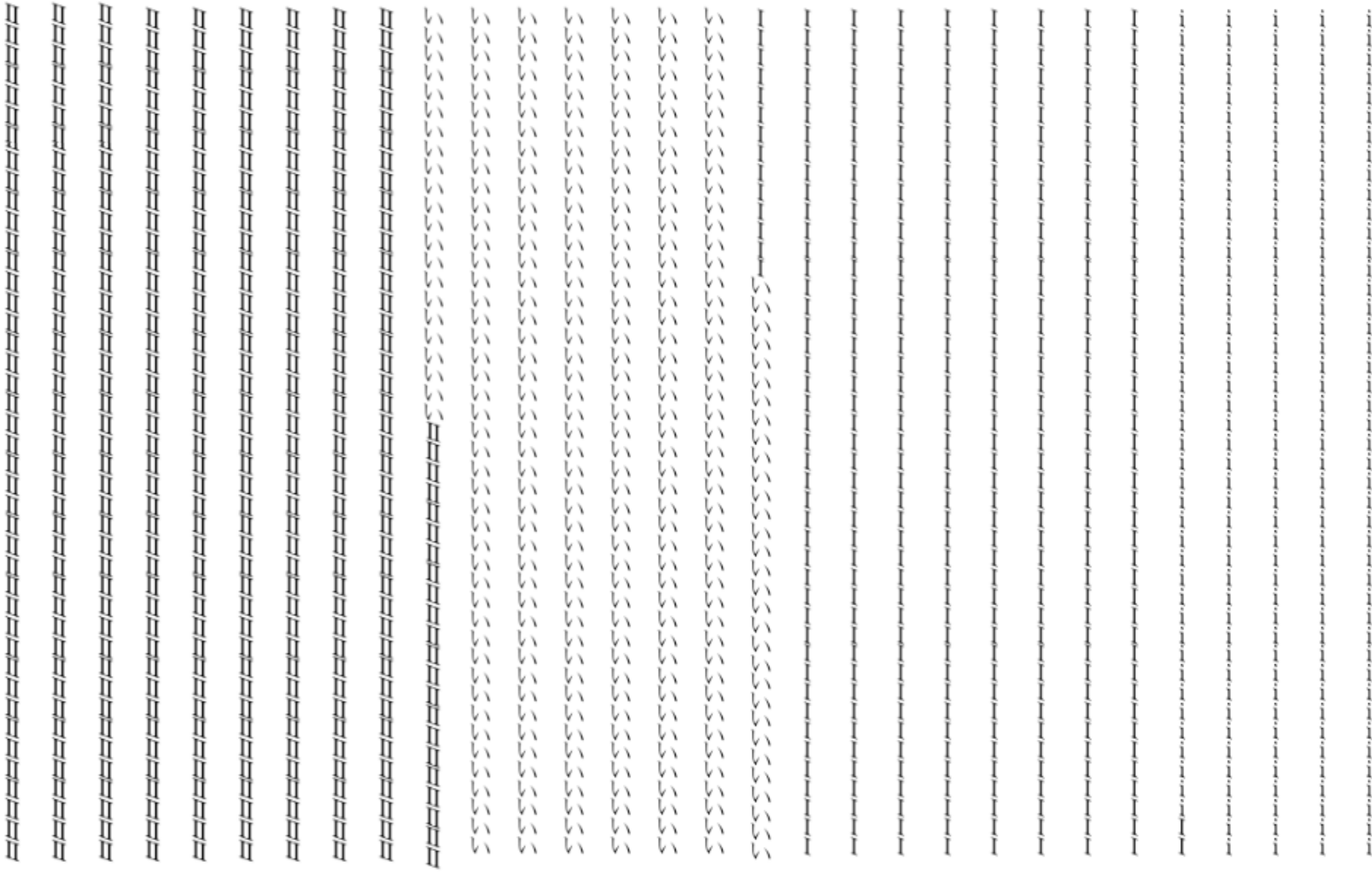
般若波羅蜜多心経觀自在菩薩行深
般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一
切苦厄舍利子色不異空空不異色色
即是空空即是色受想行識亦復如是
舍利子是諸法空相不生不滅不垢不
淨不增不減是故空中無色無受想行
識無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法
無眼界乃至無意識界無無明亦無無
明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集
滅道無智亦無得以無所得故菩提薩
垂依般若波羅蜜多故心無罣礙無主
礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究
竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波
羅蜜多是大神咒是大明咒是無上咒
是無等等咒能除一切苦真実不虛故
說般若波羅蜜多咒即說咒曰羯諦羯
諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提娑婆訶

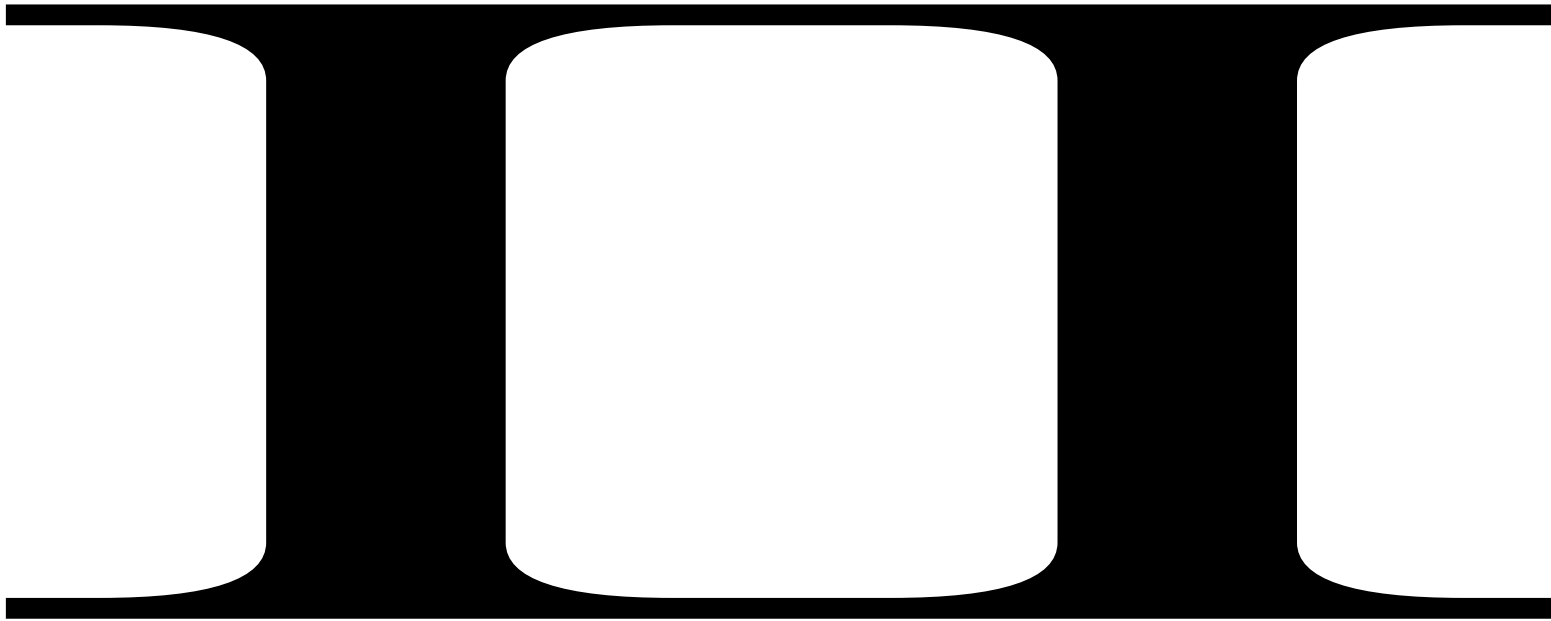
般若波羅蜜多心経觀自在菩薩行深
般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一
切苦厄舍利子色不異空空不異色色
即是空空即是色受想行識亦復如是
舍利子是諸法空相不生不滅不垢不
淨不增不減是故空中無色無受想行
識無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法
無眼界乃至無意識界無無明亦無無
明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集
滅道無智亦無得以無所得故菩提薩
垂依般若波羅蜜多故心無罣礙無主
礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究
竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波
羅蜜多是大神咒是大明咒是無上咒
是無等等咒能除一切苦真実不虛故
說般若波羅蜜多咒即說咒曰羯諦羯
諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提娑婆訶

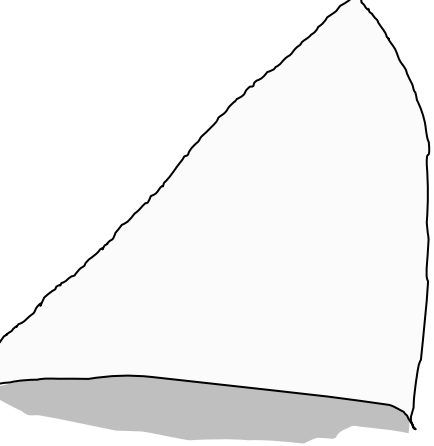
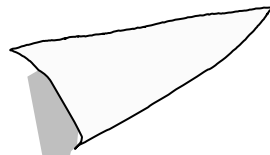
(This area contains bleed-through from the reverse side of the page.)

非イ

T T T T T T

















普蕭は当時を振り返ってこう言った。

「あのとき、僕はライトに照らされていて、イタルがよく見えていなかった。僕の耳にはイタルが二人いるように聴こえた。

なぜならばイタルのシャウトとHarpが同時に聴こえる瞬間が何度もあったからだ」
曲の終盤はリズムもテンポもひたすら速さを追いかけて滅茶苦茶になり、高層ビルディングの崩壊のように終わる。

間髪を入れず、パーカッションの音が軽快に始まった。『修羅の戯』だ。寛太嘉がいつものかセッティングを終えて、様々な打楽器を並べていた。ベ裂がファズを利かせたギターを絡めて飾る。叭羅蜜斗のベースはコンガのように軽快だった。普蕭はシンセサイザーで民族音楽的な管楽器の音を大蛇のようにうねらせる。

イタルが叫ぶようなファルセットで哄笑した。ジャングルで頬を膨らませて鳴く原始的な猿に似ていた。

そして嘲るように次のようなセリフを独白する、

「いったい、死んで逝くの^{（しん）}に何をしようとしているのか。

歌う者も死に、聴く者も死に、やがてすべての人類が滅びるのに。

それは夢でも絵空事でもなく、会社や学校なんかよりよっぽど現実だ。

夢見てんのはおまえら人間どもさ。ヒヤハハヒヤハ」

そのセリフはだんだんリズムに重なっていく。

「女と寝るよりマシを知らナイ、生まれてきても意味はナイ、生まれない方がマシだったかもしれないもなくもなくもなくかも。ヒヤハ、ヒヤッ、ハーヒヤハ、ヒヤハハハハ！」

カーリー（^{（कली）}インドの戦いの女神。血と殺戮を愛する。黒き者とも呼ばれ、三つ目と四本の腕を持つ体は黒一色で、牙をむき出した口から長い舌を垂らし、髑髏の首飾りをし、切り取った手足を腰紐にぶら下げている）――

間奏、耳を劈く。^{（ひんぎ）}

ベ裂のギターだ。緋髪のヴォーカリストは退き、ギタリストが前に出る。背を向けたイタルはドラムスの方に近附いた。普蕭の足下（トラックの荷台）から何かを取り出す。

気が附いたのは早蕨だった。彼は真今とともに公園東側（川側）の南端でミキサーやシンセサイザーに内蔵されたシーケンサーをいじっていた。ちなみにその隣で炎と哥舞伎がライティングのコントロール装置を操作している。大楽は西側の制御室で噴水を操作しつつ、警察が来ないか見張っていた。何もせず傍にいた隆臥に早蕨が声をかける。

「隆臥くん、イタルさんは何をしているんですか」

「何だろう。小さなポリタンクみたいだけど」

真兮もいぶかしがる。

「打ち合わせにはなかったが」

哥舞伎が、

「イタルだからな。何かやるんだぜ、また」

真兮も頷き、

「定めしそういうことなんだろうな。しかし一抹不安ではある」

「ああ、ほら」

今度は隆臥が指差す。

早蕨も、

「ほんとだ。撒いていますよ。あの中には、いったい……………」

『修羅の戯』が烈しくエンディングし、ライブの三曲目『雷霆神の金剛杵が眞神幼稚園

インドラ ヴァジュラ

庭に突き聳えた日に僕は解脱した、そして『雨』という長いタイトルのサイケデリック・ヘ

ビーメタル。

ベ裂の重くて速いリフで始まる。普蕭は三連符打ちつつ放し。叭羅蜜斗が大振りに手を廻して弦を打ち、雷のような重低音を轟かせた。

真兮が、

「まずいかもしれない」

「え？」

早蕨は驚いた顔をする。哥舞伎が唸りながら、

「ああ、嫌な予感が…」

イタルは右手にポリタンク、左手にマイクを持ち、噴水の中に入った。タンクの中のものさらに撒く。これで四つ目だ。叭羅蜜斗のベースがパンチングボールを殴るボクサーのようなリズムと触感とになる。ギターが加速する。イタルはHarp。普蕭が歌う。

「憂鬱な 雨の日 僕らは歩く

今日も仕方なく 歩くしかない

歩いて向かう Kindergarten (幼稚園)

現実を忘れたくって

遠い古代へ 想いを馳せる たとえば 古代インドの

異教の神が 舞う ヴェーダの時代
空想は心の翼 誰にも奪えない自由……」

イタルは一つ目の水盤に上がる。

隆臥もはつとした表情になり、

「そうか、もしや」

早蕨は訝しがり、

「何なんですか？ なぜです？ 何が」

真分が言う、

「この楽曲は最後に、イタルが炎の電撃（金剛杵）を投げつけるインドラ神になって意味不明な言葉を吐くはずだ」

哥舞伎が頷く、

「つまりあの中身はガソリンだ」

イタルはびしょ濡れになって二つ目に上がり、ジッポアの火を投じた。凄まじい炎が上がり、一番下の水槽が一瞬で炎釜に変じた。イタルの姿はまさに修羅に見えた。

「呪われる、人間ども。」

増殖する地球の癌細胞、おのれの智慧がすべてと思い、この世を謳歌する愚劣者どもよ。欲望に囚われ、とり憑かれ、亡者の如く生命を喪った者どもよ。神の聖なる怒りの炎に触れて焼かれ焦がれよ。浄化されよ。不死鳥の如く。

ああ、宇宙は生命なり。我は天上天下なり。我は解脱せり。おぶぎゃぱりやりやさかばちやらみたはがやらわぎゃちよぶぎゃ」

城壁に立つて王ギルガメッシュを呪詛したシユメールの女神イシユタルさんながらであった。

そのとき西側から大楽が叫ぶ。

「警察だ！」

同時にサイレンの音が響く。音量が凄過ぎて近附くまで気がつかなかったのだ。普簾もべ裂も叭羅蜜斗も演奏を中断し、イタルを見上げた。

炎の中、熱さを意にも留めず、傲然とした超越的態度で地上を睥睨する古代神の如くイタルは光と水と火の 焔あきらかさを浴び、不動の姿で立つ。

全員が拘束された。

いや。

イタル直筆署名

イタルだけが捕まらなかった。警察は一晩中探したが、見つからない。彼は捜査の常識からはまったく想定外の場所にいた。これ以降、彼の行動はあたかも翼があるかのごとく捉え難いものとなっていく。

「きつと捕まらないと思う」 普蕭が力なくつぶやいた。「つまり彼はもう助からないんだ」

イタルは眞神の大御山へ向かっていた。



平らかな水田に人家が墨痕のように点在し、繁った丘が寂莫たる眞神村。

いまは深夜で静寂そのものであった。

普蕭の実家である旧家、青田の海に籠盛こもりもりとした島のように浮かぶ天平家本家の傍らをイタルは歩く。水田の尽きる処はフィヨルドの海岸線のように山林と田圃の境が入り組んでいる。そこでは丘の上、中段、又は丘と丘の狭間の溪谷に沿うように、いくつかの家が石垣を構えていた。それらが哥舞伎の実家、天之家あまの本家及び分家だ。イタルは眼も遣らず、溪谷沿いの細い道を行く。谷はすぐに深く狭くなり、道が尽きる。

真奥には独峯たる眞神山があった。

独虎白龍岳や龍背鬘峯などの山々を背に屹立し、廻りを眞神川が濠のように流れている。聖なるその山は荒岩を粗く積んで出来た縦長の立方体であって、円錐形ではない。岩壁にびっしり樹木が繁茂し、巨石や大巖が剥き出す。樹木の生えたエンパイア・ステート・ビルディング *the Empire State Building* (帝国州ビル) だ。

剥き出しの岩に松が横枝を伸ばし、それ以外の場所は樹木が鬱蒼と荒巖を覆い隠す。

その眞神の御山の下層から中腹、楠や樺や櫟や辛夷や檜や榎や椎の雲霞に包まれ、いくつかの豪壮な家屋敷が岩棚に階層を成すよう数軒。

それが彝之家本家だった。

標高 399 m、剣の如き山頂には、神が降臨するとされる磐座いわくらと縄文時代の祭祀の跡があり、神彝かみい之眞斗のまことが王都彝玖鷺いくろを築いたと伝承されている。磐座は石刀型の大石で、眞神山のミニチュアのような形をしている。ロック・クライミングの装備がなくては登れるものではない。

濠のような眞神川を渡る橋。その前には切妻平入の門がある。

門の前に立ち、山上を見上げた。

「イタル！」

人気のない夜陰でいきなり呼び掛けられる。彼はまったく動じず、声のした方を見た。少女がいる。

「絶対、今日だと思った。だから最後はここに来ると思った」

「おれはまだ燃え尽きていない」

「わかってる。」

「わかってるよ！」

まあやは激しく哭き出した。

「じゃ、おれは逝くぜ」

「もう会えないの」

イタルは応えなかった。まあやは訴えた。

「また会いたいよ」

「そうだな」

「じゃ、どうしてっ……」

「まだ燃え尽きていない。」

さつき言った」

「そんな……イタル、あなたは……」

まあやは憤りのような感情に襲われた。

「あなたには、何かもうどうでもいいのね……自分のことも、家族のことも、友だちのことも。」

ただ燃え尽きたいだけ……極限に逝きたいだけ、ただそれだけっ！

それだけなのよっ」

なじられても彼の表情は涼しげだった。微動すらしない。和やかとも言えるし、木像のようでもあった。

まあやがかすれた、弱々しい微かな声で尋ねる。

「イタル。」

怖くないの」

彼は無表情であった。

「ふ。」

なぜ？ おれが世界史上で初めてじゃない。その逆だ。誰もが例外なくあたりまえに通過している。ただ、おれにとっては初めてだというだけだ」

「わかんない……イタルの言ってること、ぜんぜんわかんない」

「そうさ。エクスターゼさ。もう逝くぜ」

「待つて！ あたしも逝くわつ、じゃなきゃ、いまこで殺してくださいっ」

皓々たる月であつた。月光に照らされるイタルの顔面は冷厳そのものだった。昏い神殿の奥に聳える古代の神像のように。

縫る洲しまもない。まあやはまるでデーセウスによって Νύξος（ナクソス）島に捨てられたアリアドネのようであつた。赤いワンピースの下で皮膚は蒼白く、月光のように燦めいている。

「お願い、あなたがいらないなんて考えられない……お願いよ、もしそれが叶わないなら……」
彼女は面を挙げた。

双眸は異常な火焰で爛々としている。クリムゾンの炎を眺め、イタルが恍惚とした表情を泛かべた。それあたかも狂躁秘祭の神、葡萄酒の神、ΜΟΝΥΣΟΣ（ディオニュース）神のようであつた。血塗れになつて生贄いけにえを屠り裂く古代祭儀の神官のようでもあつた。

イタルが微笑み、緋色の髪を靡かせる。まあやの全身が白く燦めき輝く。

草叢が囁くよう揺れ、玲瓏たる銀月が傾き、眠るよう深く息をして意識を失い仆れているまあやの頬に一筋の涙の跡があつた。イタルは門をくぐる。

橋があつた。龍爪橋りゅうそうは中央に二重楼門がある珍しい橋だ。

渡り終えると第一の岩棚に着く。石垣を切った櫓門があり、櫓門を通ると、石垣で囲われた四角いスペースに出た。彼はその左手の高麗門を通る。次に短い板橋があつた。狭い岩棚に着く。

鎮守の杜のように鬱蒼はじとしていて清流が瀧のように岩を迸り流れ、眞神川へと落ちていた。

古く狭く朽ち毀れ苔生した石段が葛折りに続く。

鬱蒼とした、縄文時代の城砦門がある暗くて狭い岩棚に上がる。そこまでが生活路であつた。

枝分かれして山頂へ向かう荒岩道がある。もう一つの道は人家へ続く。そちらの方には彝之家本家の母屋の薨や玄関の大きな切妻破風が見えた。屋敷は廻廊を廻らせ、その回廊の奥尖には檜皮葺の弊殿がある。しかしその最奥にあるべき本殿はなく、ただ於上うへ不葺御門みかど、即ち鳥居があるのみであつた。磐座のある山を仰ぎ見て崇め奉るかのようになつてい

る。

イタルが到達したのは夜明け前の、薄明の頃であつた。

東空がうつすらと蒼く、限りなく清らかで美しい。

頂上に立つ。

最後のポリタンクを背から降ろし、液体を被り、マッチを擦り、天空に向かって雄叫びを上げ、石刀なる磐代の上から飛翔する炎となつた。不死なる火の鳥のように。

どうやってあの上まで登ることができたのか未だ誰にもわからない。

普蕭は語りながら涙ぐみつつ微笑した。

「おかしい男だった。

あれがラスト・ライブだったんだ。彼の。

自殺じゃない。死は表現の手段でしかなかった。観客もいない、意味すらもない、純粹なパフォーマンスのための。

誰も交えない、思いどおりの、何の制限もないパフォーマンス、そう、死すら彼を制御できなかった。

最もピュアな、純度の高いライブだ。微生物すら存在できないほど純粹な、成層圏を超えた透明な青の空気のように、あらゆる生存を拒絶して……

矛盾だらけだ。彼はあるとき僕にこう言ったんだ。

……芸術は平穩なときでなければ楽しめない。所詮、平穩時の慰みに過ぎない。御大層なもんじゃない。

苦しみにもがきのたうつとき、嫉妬の情炎に烙かれ悶え爛れるとき、現実に迫る恐怖・絶望・焦燥に震えて身も心も牽き裂けると、人はArtのことなど考えるだろうか。その程度のもののさ。

戦時や貧困や闘争にあつても楽しめるかもしれない。だが本当の苦しみのど真ん中にいるときには顧みる余裕などないだろう。

芸術は苦しみを救わない。よほどドーパミン^{※1}かアドレナリン^{※2}を噴出させる思い込みでもあれば別だが。ふ。

いや、そうであつてもどうか。歯痛止めの呪文もいまや人を歯痛からは救えない。

アートが人生の艱難辛苦を背負ってくれることはない。心をわずかに癒し、堪忍の足しになることはあるかもしれないが。しかし仕事を代わって片付けてもくれないし、家族の世話を看てもくれない。借金の肩代わりをしてくれることもない。

人はただ独り死んで逝くだけだ。昏い死に意識を塞がれ、その淵に落ちて逝くときには誰も居合わせる事ができない。

芸術とは何と虚しいものか。

人の営みは。

真実も現実性もない。人は死を超えられない………

つてね。

しかし彼は超えてしまった」

※1 ドーパミン（英: Dopamine）は、中枢神経系に存在する神経伝達物質で、アドレナリン、ノルアドレナリンの前駆体でもある。運動調節、ホルモン調節、快の感情、意欲、学習などに関わる。

※2 アドレナリン（英: Adrenaline）（英名: アドレナリン、米名: エピネフリン、IUPAC 組織名: 4-[[2-ヒドロキシ-2-(メチルアミノ)エチル]ベンゼン-1,2-ジオール）とは、副腎髄質より分泌されるホルモンであり、また、神経節や脳神経系における神経伝達物質でもある。分子式は $C_9H_{13}NO_3$ 。ストレス反応の中心的役割を果たし、血中に放出されると心拍数や血圧を上げ、瞳孔を開きブドウ糖の血中濃度（血糖値）を上げる作用などがある。

（※1及び※2はいずれもウィキペディアフリー百科事典（2011年9月11日現在）より引用）